

第二章 浮舟と匂宮の物語 匂宮、薫の声をまねて浮舟の寝所に忍び込む

[第一段 匂宮、宇治行きを大内記に相談]

ただそのことを(匂宮はただこの宇治の女のことを)、このころは思ししみたり(最近はずっと気にしていらっしやいました)。*賭弓、内宴など過ぐして(賭弓や内宴という宮中行事が過ぎて)、心のどかなるに(気分が落ち着いた正月末に)、*司召など言ひて、人の心尽くすめる方は、何とも思さねば(司召などといって臣下が心を砕く人事方面の事は関心をお持ちでない)、宇治へ忍びておはしまさむことをのみ思しめぐらす(匂宮は宇治へ忍んでお出掛けになる事ばかりをお考えになります)。*「賭弓内宴など過ぐして」は注に<賭弓は正月十八日、内宴は正月二十一、二、三頃の行事。>とある。「賭弓(のりゆみ)」は大辞泉に<平安時代の宮廷年中行事の一。射礼(じゃらい)の翌日、一般に正月18日、左右の近衛府(このえふ)・兵衛府の舎人(とねり)が行う射技を、天皇が弓場殿(ゆばどの)に出御して観覧する儀式。勝者には賭物(のりもの)を賜い、敗者には罰杯を課した。賭弓の節(せち)。>とある。匂兵部卿卷二章七段にその様子の記事があった。「内宴(ないえん)」は<平安時代、宮中で行われた内々の公事(くじ)。正月20日ごろの子(ね)の日に仁寿殿(じじゅうでん)南廂(みなみびさし)に天皇が出御、公卿以下文人を召して詩文を作らせ、また酒宴を催した。>とある。*「司召(つかさめし)」は注に<正月の中旬から下旬に行われる。>とある。大辞泉には<在京の諸官を任命する公事(くじ)。古くは春、平安中期ごろから秋に行われるようになった。内官の除目。秋の除目。京官の除目。>とある。

この内記は、望むことありて(この大内記は昇進を望む気持から)、夜昼(公私を問わず兵部卿宮のお役に立って)、いかで御心に入らむと思ふころ(何とか歓心を買おうと思って側に控えているこの時候に)、例よりはなつかしう召し使ひて(宮が何時に無く親しく呼び出しなさって)、

「いと難きことなりとも、わが言はむことは、たばかりてむや(どんな難しい事でも私の頼みなら何とかしてくれるか)」

などのたまふ(と仰るので)、かしこまりてさぶらふ(大内記は畏まって控えます)。

「いと*便なきことなれど(是は雑用だが、折り入っての相談でね)、かの宇治に住むらむ人は(例の宇治に住んでいると言う人は)、はやうほのかに見し人の(以前少し会った事がある人が)、行方も知らずなりにしが(行方知れずになったのを)、大将に尋ね取られにける(大将に捜し出されたもの)、と聞きあはすることこそあれ(どのように思い当たる事があるんだ)。たしかには知るべきやうもなきを(他に確かめようもないので)、ただ、ものより覗きなどして(ちょっと物陰から覗き見て)、それかあらぬか(見定めむ(如何なのか見定めたい)、となむ思ふ(どのように思う)。いささか人に知るまじき構へは(誰にも知られずにそうする算段は)、いかがすべき(付くだらうか)」 *「びんなし」は<不都合だ。不便だ。不憫だ。>などの語用が多いらしいが、実務上で都合が付かない時は「びんあし(便悪し)」とはっきり不成立を示す語用もあるようで、此处での「便無し」の「便」の語感には<都合>よりは<場都合→折り合い・具合→体裁>で、「びんなし」は<バツが悪い→見つともない>から転じて、官人に相談するには不相応なく非公式な、私的な雑用>という言い方、かと思う。尤も、従者は主人の私的な相談ごとに与って

こそ、便利な存在として取り入る隙を得るわけで、この「便無し」はそういう含みでの内記の意欲を量るために匂宮が水を向けた、という実にイヤラシイ語用に見える。

とのたまへば(と宮が仰るので)、「あな、わづらはし(是は面倒な)」と思へど(と思うものの)、

「おはしまさむことは(宇治への道のりは)、いと荒き山越えになむはべれど(険しい山越えになります)、ことにほど遠くはさぶらはずなむ(殊に遠い所ではございません)。夕つ方出でさせおはしまして(夕方の暗がりに紛れて出発なされば)、*亥子の時にはおはしまし着きなむ(夜の十一時にはお着きになるでしょう)。さて、暁にこそは帰らせたまはめ(そして夜明け前にはお帰りになれます)。人の知りはべらむことは(それを知るのは)、ただ御供にさぶらひはべらむこそは(ただ御供に仕えた者だけです)。それも、深き心はいかでか知りはべらむ(それも深い事情が如何して分かりましょう)」 *「亥子の時(あねのこく)」は、「亥の刻」が午後10時で、「子の刻」が午後12時で、ざっと午後11時。

と申す(と大内記は申します)。

「さかし(それはそうだ)。昔も、一度二度、通ひし道なり(昔も一度二度と通った道だ)。軽々しきもどき負ひぬべきが(しかし、軽々しいと非難されそうなので)、ものの聞こえのつつましきなり(外聞は避けなければならない)」

とて、返す返すあるまじきことに、わが御心にも思せど(と匂宮は何度も自重しなければと自分に言い聞かせなされたが)、かうまでうち出でたまへれば(此処まではっきりと口に出しなされた以上)、え思ひとどめたまはず(とても思い止めなされません)。

[第二段 宮、馬で宇治へ赴く]

御供に、昔もかしこの案内知れりし者、二、三人、この内記(御供には、昔も遣いをして宇治の事情に詳しい者の二、三人と、この大内記)、*さては御乳母子の蔵人より*かうぶり得たる若き人(それと乳母子で最近六位蔵人から五位に昇進した若い者という)、睦ましき限りを選びたまひて(親しい者だけを選びなされて)、「大将、今日明日*よにおはせじ(大将は今日明日は決していらっしゃらない)」など(などの日取りを)、内記によく案内聞きたまひて(内記によく調べさせ為されて)、出で立ちたまふにつけても(出発なさるにつけても)、いにしへを思し出づ(匂宮は昔の宇治通いを思い出します)。 *「さては」はくさてあるは=この内記とある人は>と「この内記」を説明する言い方のようにも見えるが、内記は一段に「この内記は望むことありて夜昼いかで御心に入らむと思ふころ」と司召を前に昇進を望んで兵部卿に取り入って、これから手柄を上げたいと思っているようであり、此処で言われる「御乳母子」のように縁故で出世が望める立場とは違うように思えるし、一章七段には「この人は(この大内記は)、かの殿にいと睦ましく仕うまつる家司の婿になむありければ(大将殿家にとても古くから仕えている家司の婿にあたる人なので)、隠したまふことも聞くなるべし(薫殿が内密にしていられし事も聞き知っているようです)」とあるので妻帯者であり、「かうぶり得たる若き人」というのにも違和感があり、この「さては」はくそれから、あるいは>という言い方で「この内記」とは別人を示す言い方と取って置く。 *「かうぶりう」は「冠得」でく位冠する=正装で殿上する=五位に叙せられる>ということらしい。 *「よに」の「よ」はくくれぐれも、よくよく>と注意の喚起を示す語のようで、下に打消しを伴うとく決して~しない>という言い方になるらしい。

「*あやしきまで心を合はせつつ*率てありきし人のために(妹君に合わせる手引きで、あんな込み入った計略まで示し合わせて、私を宇治に連れて行ってくれた薫君に対しては)、うしろめたきわざにもあるかな(こういう横取り計略は後ろめたい気もするな)」と、思し出づることもさまざまなるに(と思い出されなさる事も色々あるが)、京のうちだに(人が多く居て紛れ易い京の内ですえ)、むげに人知らぬ御ありきは(ごく内密な忍び歩きは)、さはいへど、えしたまはぬ御身にしも(さすがにお出来になれない御身分でありながら)、あやしきさまのやつれ姿して(粗末な下級身分の格好をして)、御馬にておはする心地も(牛車ですらなく乗馬にてお出掛けになるという気分も)、もの恐ろしくややましけれど(非常に規範に反した行動で不測の事態も案じられ気も咎めるが)、もののゆかしき方は進みたる御心なれば(女に会いたい気持ちが抑えられない御性分なので)、山深うなるままに(山道を進むほどに)、「いつしか(早く会いたい)、いかならむ(本当にあの女だろうか)、見あはすることもなくて帰らむこそ(これで会えずに帰ったら)、さうざうしくあやしかるべけれ(それこそ無性に落ち着かないだろう)」と思すに(とお思いになって)、心も騒ぎたまふ(兵部卿宮は気が急きなさいます)。 *「あやし」はく不思議だ。変だ。妙だ。>と漠然とした違和感を言う場合が多いようだが、此处では姉君を薫君が引き付けている内に寝室の妹君を匂宮に抱かせるという「あやし」い計略「まで」「心を合はせつつ(標し合わせて)」という具体事情を言っている、のだろう。 *「率てありきし人」はく自分を導き歩いてくれた薫君>らしい。内心文だからか、敬語遣いはない。

*法性寺のほどまでは御車にて、それよりぞ御馬にはたてまつりける(法性寺あたりまでは御車で、其処からは御馬をお使いになりました)。急ぎて、*宵過ぐるほどにおはしましぬ(急いだので九時過ぎにはお着きになりました)。内記、案内よく知れるかの殿の人に問い聞きたりければ(内記が、山荘の間取りを良く知る大将家の家人に尋ね聞いていたので)、宿直人ある方には寄らで(門番の居る方へは回らずに)、*葦垣し籠めたる西表を(葦垣をめぐらしてある南庭の西側を)、やをらすこしこぼちて入りぬ(静かに少し壊して入りました)。 *「ほふさうじのほど」は注に<「東屋」巻に既出。九条河原付近の寺。>とある。九条のランドマークらしい。今でも東福寺は九条東の目玉であるらしい。また、東屋巻六章六段の語りは薫殿が常陸姫を宇治へ連れ去る場面であり、其処で牛を取り替えて一休みしたらしく、兵部卿宮も此処で牛車から乗馬に換えるという宇治路の正月風情と、薫殿一行の秋の風情との比較を読者に味わはせるキーワードの意図が、この「法性寺のほど」という作者の言い方にはありそうだ。 *「よひ」は夜の始めだから、ざっと午後7~9時くらい。旧暦一月末は今の暦だと三月中旬くらいだろうから、さほどズレないだろう。で、「宵過ぐるほど」を<九時過ぎ>と見るか<十時前>と見るかだが、下文に童女が起きて居る記事があるので、まだ寝静まっていない時分に思えて、十時前よりは早い九時過ぎと見て置く。 *「葦垣(あしがき)」はアシで作った垣根のようだが、アシはヨシのことで、ヨシガキなら木枠を立て付けてヨシズを張り付けた実例写真が庭建築関係のウェブサイトアップされている。

我もさすがにまだ見ぬ御住まひなれば(大内記自身も話には聞いていたがまだ見ぬ御邸のことなので)、たどたどしけれど(良く分からなかったが)、人しげうなどしあらねば(女房などは多くはいないようで)、寝殿の南表にぞ(寝殿の南面に)、火ほの暗う見えて(火がほの暗く見えて)、そよそよとする音する(人が動く衣擦れの音がします)。参りて(内記は様子を見て来て)、

「まだ、人は起きてはべるべし(まだ人は起きているようです)。ただ(このまま)、これよりおはしまさむ(此处からお入り下さい)」

と、しるべして入れたてまつる(と宮を葦垣から庭に案内してお入れ申し上げます)。

[第三段 匂宮、浮舟とその女房らを覗き見る]

やをら昇りて(宮は庭から寝殿の階段を静かに昇って)、格子の隙あるを見つけて寄りたまふに(格子戸の隙間がある所を見つけて近寄りなされると)、*伊予簾はさらさらと鳴るもつつまし(中の伊予簾が風でさらさらと鳴るのも気付かれぬかと気になります)。新しうきよげに造りたれど(寝殿は新しくきれいに造ってあるが)、さすがに粗々しくて隙ありけるを(それでも荒い仕上げで隙間が有るのを)、誰れかは来て見むとも(誰が来て覗くものですかとでも)、うちとけて(油断して)、穴も塞たがず(穴も塞がず)、几帳の帷子うちかけておしやりたり(几帳の帷子を跳ね上げて脇へ押し遣ってあって、丸見えです)。*「伊予簾(いやす、いやすだれ)」は大辞泉に<伊予国上浮穴(かみうけな)郡露峰(つゆのみね)産の篠竹(しのだけ)で編んだ上等のすだれ。いやす。>とある。

火明う灯して、もの縫ふ人、三、四人居たり(室内には火を明るく灯して縫い物をしている女房が三、四人居ました)。童のをかしげなる、糸をぞ*繕る(童女の可愛い子が糸運びの手伝いで側に控えています)。これが顔(この子の顔は)、*まづ*かの火影に見たまひしそれなり(まあ恐らく、あの時に火影で御覧になったそれで)、うちつけ目かと(ちょっと見の見間違いかと)、なほ疑はしきに(まだあやふやだったが)、*右近と名のりし若き人もあり(あの時に右近と名乗っていた若女房もこの中に居たのです)。君は、腕を枕にて(姫君は腕枕で)、火を眺めたるまみ(燈火を眺める目元や)、髪のかぼれかかりたる額つき(髪が隠し気味の額の形が)、いとあてやかになまめきて(とても上品で艶っぽく)、対の御方にいとようおぼえたり(対の御方にとてもよく似ていました)。*「繕る(よる)」は<二本の糸をねじって寄り合わせる>という意味が多いようだが、また此処でも「糸をぞ」とはあるが、繕り糸を作るのはそれ自体が大変な作業で、子供が裁縫の場でこなせる仕事ではない。子供の手伝いなら絡んだ糸を手巻きして揃える手伝いをするような事も考えられるが、縫い子が糸を絡ませないように工夫しないわけもなく、それもあまり納得できない。そこで少し飛躍気味だが、「糸をぞ」の「をぞ」は縫い物に付き物の事柄の<その役目を>という語感であり、裁縫の雑用だと、例えば糸運びとか糸周りの片付けなどはありそうで、此処での「糸」は<糸運び>で、「をぞ」は<その役目として>という言い方と考えてはどうか。で、此処からは更に飛躍するが、「よる」は「寄る」との掛詞で、童女は裁縫の目勉強がてらく糸運び係りとして女房の側に控えていた>とは読めないだろうか。*「まづ」は<真っ先に。何よりも先に。>という語用が多いが、此処では下に「うちつけ目かとなほ疑はしきに」と語られるので、取り敢えずの<一先ずは>という語感で<ちょっと見ではどうやら>くらいの言い方のようだ。*「かの火影に見たまひしそれなり」は注に<二条院で浮舟と一緒にいたのを見た童女。「東屋」巻には「火影」云々の描写はなかった。>とある。ただ、東屋巻四章二段に「夕つ方宮こなたに渡らせたまへれば～(中略)～宮はたたずみ歩きたまひて西の方に例ならぬ童の見えつるを、今参りたるかなと思してさし覗きたまふ」とあって、匂宮が常陸姫を見付ける出汁にされていた童女が、この童女だったようには読める。それでも確かに、「火影に見たまひしそれ」というのは東屋巻の話とは相違する。部屋明かりは、御方付きの女房の<右近>が常陸姫の居た物置部屋にまで戸締りに見回って来て、其処で匂宮が常陸姫に言い寄っているのを目撃して、そして部屋が暗いと右近が他の女房にでも用意させて、その後には点けられたはずであり、東屋巻ではその後のその場面には童女の登場はなかった、のである。しかし、「火影(ほかげ)」を<夕日>とは、いくらなんでも言えないので、本文に従って言い換える他はない。*「右近と名のりし若き人もあり」は注に<『新大系』は「あの時、右近と名のったのは、中君づきの侍女。ここは浮舟づき。同名の別人か、匂宮の思い違い」と注す。>とある。しかし、東屋巻四章三段で「右近はいかにか聞こえさせむ。今参りて御前にこそは忍びて聞こえさせめ」と、右近が自分を「右近」と

言っていたのは名乗りではない。是は、下位者が上位者に対して自分を<我>とは自己主張できず、従者としての立場を<呼び出される時の自分の名前を言う事>で示す言い方だ。御方の女房の右近は「右近とて大輔が娘のさぶらふ」(東屋巻四章三段)と説明されていて、古参女房の「大輔の娘」なのだから、兵部卿宮は当然に以前から見知っている筈だ。だから「匂宮の思い違い」は有り得ず、また今回は出会い場面での脱稿も考え難い妙な展開だが、仮に作者や写本者が東屋巻の出会い場面での記述に思い違いがあったとしても、「同名の別人」として扱う以外の選択の余地など読者には無い。だから注釈は<「右近と名のりし若き人」は東屋巻の出会いの場面には該当記事が無く参照不能。また、この「右近」は常陸姫の女房であり、東屋巻に登場した御方付きの女房の「右近」とは別人と見做す他ない。>と明示すべきだ。勿論、更に詳しい傍証を東屋巻などの本文引用を以て示せばより親切だろうが、まずは本文に依拠した基本的な読者姿勢を示して一般読者の道案内を図る、という事が専門家に課せられた重要な責務だ。

この右近、*物折るとて(その右近が反物に縫い代の折り目を付けるために態勢を変えながら)、*「物折るとて」は注に<『完訳』は「裁縫で反物に折り目をつける」と注す。>とある。「物折る」にそういう慣用か専門用語かの語用があるのだろうか。あるなら、その用例や有職典拠なりを示して解説して欲しい。そうして貰えると、何と云うか、安心して分かった気分になれる。が、渋谷訳文には<衣類を折り畳もうとして>とあり、そういう言い方だと、畳んで仕舞う作業のようでもあり紛らわしい。ただ、下文を少し読み進むと、此処ではまだ裁縫が終わってはいなさそうなので、「裁縫で反物に折り目をつける」という作業と読んで置く。なお、「とて」は与謝野訳文に<(折り目をつけるために)身をかがめながら>と補語されていて、私もこの「とて」に右近が此処でそれまでとは姿勢を変えた、という語調を読んで置く。

「*かくて渡らせたまひなば(このように準備して外出なされば)、とみにしもえ帰り渡らせたまはじを(直ぐにはお帰りになれないのでしょうが)、殿は(大将殿は)、『この司召のほど過ぎて(今月の任官人事が終わって)、*朔日ころにはかならずおはしましなむ(二月初旬には必ずお越しなさいます)』と、昨日の御使も申しけり(と昨日の御文遣いも申ししていました)。*御文には(殿への御返書には)、いかが聞こえさせたまへりけむ(何とお書きあそばしましたか)」 *「かくて渡らせたまひなば」は注に<以下「聞こえさせたまへりけむ」まで、右近の詞。主語は浮舟。物語での話。>とある。「物語での話」であることは下文の様子からはっきりするようだが、この時点では何の話か分からない。また、「物語で」は<後文によれば石山詣で。>と下文で注釈されている。つまり、この裁縫の場面は<近く予定されている石山詣でのための準備をしている>ということらしい。いや、そういう事情を知らない兵部卿宮の視点で語られている、という臨場感の演出はありだろうし、物語では普通の話運びにも見える。だから、是が現代語文である当時の読者にとっては普通に楽しめる語りなのかも知れないが、今の読者である私にとっては、読者には事前に石山行きの事情を知らせても、事情を知らない宮がこの裁縫場面を覗き見ている臨場感を演出することはいくらでも出来るだろうに、と話の分かり難さに不満を覚えざるを得ない。しかも、この時点では石山詣での事情を知らない兵部卿宮の視点からすれば、何処かへ出かける予定らしい、とは察せられても、それを<石山詣で>とはわからないのだから、言い換え文でも明示補語は出来ない、ということになる。 *「朔日ころ(ついたちころ)」は注に<二月初めころ。>とある。 *「御文(おおんふみ)」は注に<薫への返書。>とある。

と言へど(と言ったが)、いらへもせず(姫は応えもせず)、いともの思ひたるけしきなり(とても物思いに沈んでいる様子です)。

「折しも、はひ隠れさせたまへるやうならむが(わざと殿を避けるようにお成りなのが)、見苦しき(不都合です)」

と言へば(と右近が続けると)、*向ひたる人(その向かいに座している女房が)、 *「向ひたる人」は注に<後文によれば侍従。>とある。ということは、侍従を敢えて其と明示しないという作文姿勢は、読者に侍従の後姿しか覗き見えていない兵部卿視点を強く意識させる意図がある、と改めて思わせるので、その心算で言い換え文にも留意する。この作者は物語当初から映画風の視点演出を好む、という印象が私にはある。

「それは(そのことは)、かくなむ*渡りぬると(この期間はこのように外出して居りますと)、御消息聞こえさせたまへらむこそよからめ(大将殿にお知らせ申しなさるのが良いでしょう)。軽々しう、いかでかは(軽率に如何して)、音なくては(黙って)、はひ隠れさせたまはむ(不在なされましよう)。御物詣での後は(御参詣の後は)、*やがて渡りおはしましねかし(そのまま此方にお戻りなさいませね)。かくて心細きやうなれど(此処は、このように待ち人暮らしの心細い生活のようでも)、心にまかせてやすらかなる御住まひにならひて(気ままで落ち着いた御自宅なので)、*なかなか旅心地すべしや(御実家にお寄りなさるのは、却って余所余所しい旅心地で落ち着かないでしょう)」 *「渡りぬる」の「る」は自発の助動詞「る」の終止形で<渡ったことになる→外出する予定だ>という言い方だろう。良く分からないが、女言葉あるいは下位者の言い方として、意志の「む」で<渡らむ>と我を張るのは憚られるような気がするので、「る」が完了の助動詞「り」の連体形だとすれば、事後報告は「渡りぬるれり」となるのだろう。 *「やがて渡りおはしましねかし」は注に<この宇治の山荘に。京の母の邸にではなく、の意。>とある。「おはす」は<「居る」の尊敬語>だから<居座る→居住する→自宅に帰る>という言い方になるのだろうか。行く先が他所なら<渡りたまふ>と言うのかも知れない。また、「ましね」は<申して置きますから、そうして下さい>だから、是だけでは現代語の<ませね>という強い口調にはならず<ませ>くらいの言い方だろう。そこに「かし」の念押しが加わる事で現代語の<ませね>になる、かと思う。 *「なかなか旅心地すべしや」は注に<京の母の邸はかえって他人の家の心地。>とある。この文意も兵部卿宮は姫の素性を知らないので常陸守邸という具体事情は分からないだろうが、「なかなか」という半反意から<本来の住居=実家>のこととは察せられる、かと思う。

など言ふ(などと言います)。またあるは(また別の一人は)、

「なほ、しばし(やはり暫くは)、かくて待ちきこえさせたまはむぞ(此処でこのように大将殿を待ち暮らし申しなさるのが)、のどやかに*さまよかるべき(ゆっくり出来て順当そうです)。京へなど迎へたてまつらせたまへらむ後(大将が君を京にお迎え申し下された後で)、*おだしくて親にも見えたてまつらせたまへかし(落ち着いて母君にお会い申しなされませ)。この*おとどの(今回は大姉さまが)、いと急にもものしたまひて(本当に性急でいらっしやって)、にはかに*かう聞こえなしたまふなめりかし(奥様に急にこういう姫君の外出を吹聴なさったようです)。昔も今も、もの念じしてのどかなる人こそ(昔も今も慌てずに我慢してじっとしている人が)、幸ひは見果てたまふなれ(最後は幸いを得なさるものです)」 *「さまよし」は<体裁が良い>という漠然とした言い方でも良さそうだが、此処ではもう少し具体的な意味合いがあって<万事都合が良い=順当だ>くらいに聞こえる。 *「おだし」は古語辞典に<穏やかだ。落ち着いている。安らかである。>とある。 *「おとど」は注に<乳母をさす。>とある。が、匂宮には是が<乳母>だとは確認できていない様なので<大姉さま>くらいにして置く。 *「かう」は注に<参詣を母君に勧めたこと。>とある。「なしたまふなめりかし」という言い回しが事情を物語っている。注釈に習って何とか文意を探ると、どうやら、乳母が守夫人に姫の石山詣でと、それに託けた実家帰りを吹聴し、守夫人がその話に乗って、姫に参詣と帰省を促す書状を送った、という事情らしい。が、匂宮には分からない事情なので「かう」はそのまま<かう>として置く。

など言ふなり(などを言うようです)。右近(右近は)、

「などで、この*乳母を*とどめたてまつらずなりにけむ(如何して乳母の上京を引き止め申さなかったのだろう)。老いぬる人は、むつかしき心のあるにこそ(老人は頑固だと分かっているのに)」 *「乳母」は「まま」と読みがある。注には<『集成』は「「まま」は、乳母を親しみ呼ぶ語」と注す。>とある。ということは、写本では「まま」も「めのと」も仮名書きの所を分かり易いようにと漢字表記に校訂してあるのだろうが、一つの漢字表記が一つの読みに対応していないと却って紛らわしい。「乳母」は「めのと」を漢字表記したものと固定して、「まま」は仮名書きのままに表記する方が分かり易い。その上で、「まま」に<乳母を親しみ呼ぶ語>と注釈すれば済む話だ。 *「とどめたてまつらずなりにけむ」は注に<上京を。後悔する気持ち。>とある。「上京を」ということは<乳母が常陸守邸の母君のところへ進言しに上京するのを(止めれば良かった)>という意味だろうか。ということは、乳母は日頃は宇治山荘に来ていて姫に側仕えしている、ということで、今は常陸守邸に上京していて山荘には不在、ということだろうか。もしかすると、そういう事情まで知れるのが、当時の女房内で語られる「まま」の近しい語感かも知れない。

と憎むは(と愚痴るのは)、乳母やうの人をそしる*なめり(乳母らしき人を非難しているらしい)。「げに(確かに、去年の出会いの時に)、憎き者ありかし(私を睨みつけていた怖い乳母が居たっけ)」と思し出づるも(と思い出しなされるのも)、*夢の心地ぞする(夢を見ていたような、どこか現実離れしたことに思えて、兵部卿は今も平気で大胆に振舞えそうな気がします)。 *「なめり」は<匂宮の推測>と注にある。即ち、匂宮の視点での語り、である。 *「夢の心地ぞする」は<夢を見ているような気がします>という言い方だろうが、この言い方で示されている匂宮の心理状態は注目に値する、ような気がする。というか、「夢のよう」という<現実離れした感覚>は、多分誰でも、遠慮がちに言っても、恐らく多くの人が、何度かは経験しているだろうし、「夢のよう」という言い方でその浮遊感は伝わるように思うが、浮遊感も軽さでもあるが不安定さでもあって、単に高揚感を示すだけでなく、不測の事態が起きる危険性も暗示されていて、此処の「夢の心地」という語用は「憎き者」を<嬉しく思う>のは定義違反なので、むしろ其を乗り越える興奮状態を示していると考えられ、であれば不穏な先行きを期待させる言い方に見えるので、左様に明示補語する。

かたはらいたきまで(女房たちは、傍目には行儀悪いほど)、うちとけたることどもを言ひて(明け透けな軽口を気楽に話していて)、

「宮の上こそ(二条院の御方は)、いとめでたき御幸ひなれ(本当に御幸せです)。右の大殿の(右大臣が)、さばかりめでたき御勢ひにて(如何にも優れた御権勢にて)、いかめしうののしりたまふなれど(六姫を威厳ある正室として公言なさっていらっしゃるが)、若君生れたまひて後は(若君が御方腹にお生まれになってからは)、こよなくぞおはしますなる(格別大事にされていらっしゃるようです)。かかるさかしら人どものおはせで(乳母のような口煩い姉さまがたがいらっしゃらずに)、御心のどかに(御心もゆったりと)、かしこうもてなしておはしますにこそはあめれ(殿方を上手に持て成していらっしゃる賜物で、子宝を授かりなされたんでしょね)」

と言ふ(と下世話話をします)。

「殿だに(大将殿も)、まめやかに思ひきこえたまふこと変はらずは(まめにお通いなさるお気持ちが変わらなければ)、劣りきこえたまふべきことかは(姫君も御方様に後れを取らず御懐妊なさいましように)」

と言ふを(と女房が続けて言うと)、君、すこし起き上がりて(姫君は少し起き上がって)、

「いと聞きにくきこと(言い過ぎです)。よその人にこそ(他の人が相手なら)、劣らじともいかにとも思はめ(負けないとも如何とも思いますが)、かの御ことなかけても言ひそ(御方様を引き合いに出すのは慎みなさい)。漏り聞こゆるやうもあらば(そんな話が出回っては)、かたはらいたからむ(恥ずかしい)」

など言ふ(と言います)。

[第四段 匂宮、薫の声をまねて浮舟の寝所に忍び込む]

「何ばかりの*親族にかはあらむ(この遣り取りからしてもこの姫は、とにかく御方の親族に違いなさそうだ)。いとよくも似かよひたるけはひかな(とても良く似通った雰囲気だ)」と思ひ比ぶるに(と兵部卿は思い比べてみると)、心恥づかしげにてあてなるところは(毅然とした上品さは)、かれはいとこよなし(御方が格別で)、これはただらうたげにこまかなるところぞいとをかしき(この姫は何しろ可愛く小柄な所がとても魅力的です)。 *「親族」は「しぞく」と読みがあるが、これは撥音の「ん」が無表記となっている書き方によるもので、実際は<しんぞく>と漢文読みをするらしい。この時点で匂宮はこの姫を御方の親族と確信した、ということになるようだ。正月に若君に小松引きの飾り物が贈られた時点で縁者だろうとは察せられた筈だが、此处で実際に実感した、ということらしい。ただ、何も匂宮は此处で初めてこの姫を見るわけではない。去年の八月にも会っていて、その時の諸事情を勘案すれば、その可能性には直ぐに気付きそうだが、本文にこう書いてある以上、此处で実感したものと見て置こう。

よろしう、なりあはぬところを見つけたらむにてだに(何処か欠点を見つけていてさえ)、さばかりゆかしと思しめたる人を(一度抱きたいと思ひ込んだ女を)、それと見て(そう思っただけで)、さてやみたまふべき御心ならねば(抑えていらっしゃれる御気性ではないので)、まして隈もなく見たまふに(まして欠点も無いとお思いになったので)、「いかでかこれをわがものにはなすべき(如何してもこの姫を自分のものにしたい)」と、心も空になりたまひて(と兵部卿は気もそぞろに)、なほまもりたまへば(更に覗き見なさっていると)、右近(右近が)、

「いとねぶたし(もう眠たい)。昨夜もすずろに起き明かしてき(昨夜もつい夜更かししました)。*明朝のほどにも、これは縫ひてむ(明朝また、この続きは縫いましょう)。*急がせたまふとも(奥様が急がせなさっても)、御車は日たけてぞあらむ(迎えの御車は日が高くなってからの到着になるでしょうから)」 *「明朝」は「つとめて」と読みがある。仮名表記にして<明朝>と注する方が分かり易いんじゃないのか。 *「急がせたまふとも」は注に<主語は薫。>とある。が、同意出来ない。先に、「それはかくなむ渡りぬると御消息聞こえさせたまへらむこそよからめ」(三段)と女房が姫に話していたことから、この石山詣では守夫人の差し金によるもので、むしろ薫大将はまだこの姫の外出を知らないはずで、だから、それこそ明朝にも姫は大将にその旨を手紙に認めるのだろうし、車を差し向けてくるのは守夫人に違いない。

と言ひて(と言って)、しきたるものどもとり具して(縫いかけの衣類を取り集めて)、几帳にうち掛けなどしつつ(几帳に被せ掛けては)、うたた寝のさまに寄り臥しぬ(仮眠のようにその場で脇息にもたれて休みます)。君もすこし奥に入りて臥す(姫君も少し奥に入って横になります)。右近は北表に行きて(すると右近は北奥に洗面に出て)、しばしありてぞ来たる(しばらくしてから部屋に戻って来て)、君のあと近く臥しぬ(姫君の足許近くに横になりました)。

ねぶたしと思ひ*ければ(よほど眠かったようで)、いととう寝入りぬるけしきを見たまひて(早々に寝入ってしまう右近の様子を兵部卿は御覧になって)、またせむやうもなければ(他に呼び寄せる手立てもないので)、忍びやかにこの格子をたたきたまふ(そっとその格子戸を叩きなさいます)。 *「けり」は意外な気付きを示す助動詞と古語辞典に説明がある。

右近聞きつけて(右近は聞きつけて)、「誰そ(たそ、誰ですか)」と言ふ(と言います)。声づくりたまへば(兵部卿が咳払いなさると)、あてなるしはぶきと聞き知りて(高貴な方の来訪と気付いて)、「殿のおはしたるにや(殿がいらっしゃっている)」と思ひて、起きて出でたり(と思つて起きて出て来ました)。

「まづ、これ開けよ(早く此処を開けなさい)」

とのたまへば(と兵部卿が仰ると)、

「あやしう(何事でしょう)。おぼえなきほどにもはべるかな(お知らせも無く)。夜はいたう更けはべりぬらむものを(夜もだいぶ更けて居りますものを)」

と言ふ(と右近は言います)。

「ものへ渡りたまふべかなりと(姫君が外出なさるようだ)、*仲信が言ひつれば(仲信が言っていたので)、驚かれつるまゝに出で立ちて(驚いて遣つて来た)。いとこそわりなかりつれ(何事かはこっちの台詞だ)。まづ開けよ(早く開けなさい)」 *「仲信(なかのぶ)」は注に<薫の家司。匂宮は薫を装う。>とある。大内記の養父に当たる家司なのだろう。

とのたまふ声(と兵部卿の仰る声は)、いとようまねび似せたまひて(とても良く大将殿に似せていらっしゃって)、忍びたれば(小声でもあったので)、思ひも寄らず(まさか別人とは思ひも寄らず)、かい放つ(右近は妻戸を急いで開けます)。

「道にて(馬で急ぎ来て)、いとわりなく恐ろしきことのありつれば(山道で危うく落馬しかけて)、あやしき姿になりてなむ(ひどい格好だ)。火暗うなせ(火を暗くせよ)」

とのたまへば(と宮が仰ると)、

「あな、いみじ(それは大変)」

とあわてまどひて(と右近は慌てふためいて)、火は*取りやりつ(燈火を片付けます)。 *「取り遣る」は< [動ラ四] 取りかたづける。とりのける。>と大辞泉にある。

「我、人に見すなよ(私を誰にも見せるな)。来たりとて、人驚かすな(殿が来たと言って女房を起こすな)」

と、いと*らうらうじき御心にて(と匂宮はこの手のことにはとても機転がお利きで)、もとよりもほのかに似たる御声を(もともといくらか似ている御声を)、ただかの御けはひにまねびて入りたまふ(上手に大将の口ぶりに真似て姫の寝室に入りなさいます)。「ゆゆしきことのさまのたまひつる(ひどい目に遭ったと仰ったが)、いかなる御姿ならむ(どんな御姿だろう)」といとほしくて(と右近は気になって)、我も隠ろへて見たてまつる(自分も他の女房に気付かれないように部屋に隠れ入って、大将であろうこの人を拝し申します)。*「らうらうじ」はく物慣れている。物事に巧みである。>と大辞泉にある。

いと細やかになよなよと装束きて(偽大将はとても繊細で柔らかい着こなして)、香の香うばしきことも劣らず(香りの芳しさも本物に劣りません)。近う寄りて(偽大将は姫に近付いて)、御衣ども脱ぎ(上着を脱いで)、馴れ顔にうち臥したまへれば(馴れ馴れしく添い寝なされたので)、

「例の御座にこそ(いつもの御寝台へどうぞ)」

など言へど(と右近が言ったが)、ものものたまはず(偽大将は何も仰いません)。御衾参りて(右近は偽大将に布団をお掛けして)、寝つる人びと起こして(近くに寝ていた女房たちを起こして)、*すこし退きて皆寝ぬ(素早く退室して皆寝ました)。御供の人など(御供の侍を)、*例の(普段から)、ここには知らぬならひにて(姫君の方では御世話せず、尼君の方で面倒を見ていたので)、*「すこししぞきて」はどういう事を言っているのか。「しぞく」はく退き下がる→遠ざかる>でもあるがく退席する、退室する>でもありそうで、姫の寝室に殿が来たというこの状況からして、私はく女房たちは退室した>と考えたい。となると、「少し」はく短い距離>とは思えず、程度の少なさのような気がするが、何の程度なのかが分からない。で、どうにも上手い解釈が出来ず、強引ながら文意が成立するようにく手短かに→素早く>と取って置く。*「例のここには知らぬならひにて」は注にく『集成』は「薫の家来は、いつも、浮舟方では接待せぬことになっているので。弁の尼のいる廊の方で世話をする習慣なのでであろう」と注す。>とある。従って補語する。また、この「ならひにて」は事情説明項で何らかの修辭を導くはずだが、その修辭の明示はないままに「など言ひつつ寝ぬ」に繋がる構文なので、省かれた修辭はくこの日も誰も世話焼きに起き出す女房もなく(そのままさっさと寝入った)>ということになりそうだ。その事が結果としてく匂宮の偽大将を見抜けなかった>ということになるのかもしれないが、それは何も、この日の世話をしなかったから従者の違いに気付かなかった、のではなく、日頃から世話をしていなかったため、仮にこの日は世話をしたとしても、当然に大内記を初め腹心の従者はトボケルだろうから、他家の従者とは気付かなかった可能性は大であり、「など言ひつつ寝ぬ」が示す文意は確かに女房たちの呑気さではありそうだが、だからく偽が見抜けなかった>とは言い過ぎの気がする。

「あはれなる、夜のおはしましごまかな(情け深い殿のお出ましぶりだこと)」

「かかる御ありさまを、御覧じ知らぬよ(石山詣での外出をお知らせなさらないとは、こういう殿の御熱心さを、姫君はお分かりでなかったんですね)」

など(などと宮の偽大将に気付かず)、さかしらがる人もあれど(分かった風なことをいう者も居たが)、

「あなかま、たまへ(静かに為さい)。夜声は、ささめくしもぞ、かしかましき(夜の声は小声ほど気になります)」

など言ひつつ寝ぬ(などと右近が言うままに、さっさと女房たちは寝ました)。

女君は(兵部卿に抱かれた姫君は)、「あらぬ人なりけり(大将ではない)」と思ふに(と分かる)、あさましういみじけれど(驚くべきとんでもないことだったが)、声をだにせさせたまはず(宮は姫に声さえ上げさせなさらず)、いとつつましかりし所にてだに(御方の手前で極力女遊びを控えるべき二条院に於いてさえ)、わりなかりし御心なれば(自制の利かない好色な御性分なので)、ひたぶるにあさまし(まして人目のないこの山荘に於いては、姫の女体を貪るに憚る所はありません)。「をんなぎみ」の此処での語用は正に閨の場面なので<抱かれた姫君>を示す。

初めよりあらぬ人と知りたらば(初めから別人と知っていたら)、いかが*いふかひもあるべきを(どうにかして拒む術もあったろうが)、*夢の心地するに(姫は大将に抱かれる快感の夢心地で居る内に)、やうやう(次第に相手の男が)、その折のつらかりし(以前の出会いで抱けぬままに終わった不遇や)、年月ごろ思ひわたるさまのたまふに(それ以来ずっと忘れずに居たことなどを仰るので)、この宮と知りぬ(自分を抱えているのが大将ではなく兵部卿だと気付いたのです)。*「いふかひ」は<効果のある方策>で、此処では<拒む手立て>。*「夢の心地」の語用はすぐ上にもあって、その場面でもいくらかの違和感があったが、此処でこういう使い方をされると、如何にも其が前振りだったように見えてくる。この「夢の心地」という語は其自体が、楽しさに心が浮き立つ場合でさえ現実味を失った不安定さが将来の不吉を示す、という実に意味深なものだが、此処では大将と思いついで身を任せていた性戯の快楽での陶酔感までが誤解に基づくもので、実は別人に玩ばれていたという絶望的な状況に次第に気付く、という殆んどホラー映画に近い展開だ。それにまた、女の性感を「夢の心地」と表現する事自体が今までとは少し異質で、「ひたぶるにあさまし」と共に相当に大胆な好色性向が感じられるが、この筆致は読者の期待に応えたものなのか、桐壺帝が桐壺更衣に見せた激情や朱雀帝が有明姫に見せた劣情の場面と共に王家の崇高な性愛を示すものなのか、両方なのか、また別の意図なのか、などは不明だ。

いよいよ恥づかしく(姫はいよいよ以て恥づかしく)、かの上の御ことなど思ふに(義姉の御方様のことを思うと)、*またたけきことなれば(これ以上の裏切りはないので)、*限りなう泣く(その罪悪感から心底泣きます)。宮も(匂宮の方も)、*なかなかにて(姫が思った以上に情趣深い抱き心地の女だったので)、たはやすく逢ひ見ざらむことなどを思ふに(今後は容易には会って抱けそうもないと思ひなさって)、*泣きたまふ(此方は悔し泣きなさいます)。*「またたけし」は<別の凄さ→これ以上の>。「ことなし」の「こと」は<異・異常>で、此処では親身に世話してくれた義姉への<裏切り>を意味するのだろう。*「かぎりなし」は<いつまでも>または<非常に>という語用が多いのだろうが、此処では罪悪感に苛まれた絶望感から<この先どう生きていけば良いのか分からない>くらいの重い表現に聞こえる。下の「宮も～泣きたまふ」の軽い語感と比して、「宮も」の「も」が姫に対して不遜なくらいの異質感がある。この物語ではいくつかの犯罪行為、控え目に言えば反社会的言動が、犯人ないし当事者の地位の高さや人間関係の機微から隠蔽されたままに成立していて、その毒素が読者に人生の振幅の大きさを感じさせている、という要素が非常に重要な構成企画の軸なのだろうが、藤壺宮や女二の宮の不倫と比しても、この常陸姫の尊厳の無さは特異で、というか、王家血筋とは言え実態としての身分差が中宮や内親王と地方官の娘とでは比較にならないほどかけ離れているのではあろうが、ともあれ、この姫の絶望感は、またその自覚は、今までの登場人物とは別物に思える。この先にどう

いう展開が有るのかは分からないが、奇妙なほど軽々しく振舞う匂宮の姿に反して、常陸姫の苦悩の深さが示されるといふ、何とも苦々しい味わいだ。*「なかなかにて」は抱き心地の程度を言うもので、読者各位にその実感を想像させるイヤラシイ語用だ。*「泣きたまふ」は姫が「限りなう泣く」のに比して如何にも軽く、呆れ口調の女房語りに聞こえるので、そのように言い換えて置く。

[第五段 翌朝、匂宮、京へ帰らず居座る]

夜は、ただ明けに明く(夜はそんな切ない事情を余所に、どんどん明けてゆきます)。御供の人来て声づくる(御供の者が御帰宅を促す咳払いをします)。右近聞きて参れり(右近がそれを聞いて、殿にお知らせ申すべく姫の御部屋に参上しました)。出でたまはむ心地もなく(しかし匂宮はお帰りになる気がなさらず)、飽かずあはれなるに(姫の事が可愛くて堪らず)、またおはしまさむことも難ければ(再来なさることも難しいので)、「京には求め騒がるとも(京で私が居ないと探し騒ぐとしても)、今日ばかりはかくてあらむ(今日だけは此処に留まりたい)。*何事も生ける限りのためこそあれ(何より愛する事が生き甲斐なのだから)」、ただ今出でおはしまさむは(と、今お帰りになって生き甲斐を捨てるのは)、まことに死ぬべく思さるれば(本当に死ぬようなものだと思われなさるので)、この右近を召し寄せて(この右近を側へ呼び寄せなさって)、*「何事も生ける限りのためこそあれ」は注に『源氏積』は「恋死なむ後は何せむ生ける日のためこそ人は見まくほしけれ」(拾遺集恋一、六八五、大伴百世)を指摘。>とある。「生ける」は<[連語]《動詞「い(生)く」(四段)の已然形+完了の助動詞「り」の連体形》生きている。「生きとしもの」>と大辞泉にある。已然形は観察対象の状態説明項を提示する語尾変化で、その状態の結果または作用で示されるべき何らかの修辭(結論)を主張しようとする意図に基づいて語用されるので、助動詞「り」が基本的に示すのは、完了というよりは状態だ。また、四段活用の「生く」は自動詞の<生きる>なので、寿命として<生かされている>ということではなく、主体的に<生き生きと生きている>という語感で、「生ける日のため」は<生きているから>ではなく<生き生きとした日を送るために必要だから=生き甲斐だから>という言い方。引き歌は<恋に死のう、他は意味がない、愛する事が生き甲斐だ>と丸で今の歌謡曲と変わらない。素直に気持を表わせば名文句になる、ってことだろうか。で、この歌を下敷きにした「何事も生ける限りのため」は<とにかく生きていなくちゃ始まらない=死んで花実が咲くものか>ではなく<何より愛する事が生き甲斐だ>みたいな言い回し。

「いと*心地なしと思はれぬべけれど(非常識と思われそうだが)、今日はえ出づまじうなむある(今日は帰りたくない)。男どもは(供人たちは)、このわたり近からむ所に、よく隠ろへてさぶらへ(この付近に上手く隠れて控えていなさい)。*時方は、京へものして(時方は京へ帰って)、『山寺に忍びてなむ(私は山寺へ忍んで行っている)』とつきづきしからむさまに(と上手く取り成して)、いらへなどせよ(応対して置け)」*「こちなし」は<思慮分別がない>と古語辞典にある。「心地」は<心持ち、気分>の他に<心構え>をいう言い方でもあるらしい。*「時方(ときかた)」は注に<匂宮の乳母子。>とある。後文から知れるらしいが、今は従者の一人としか分からない

とのたまふに(と従者への指示を命じなさるので)、*いとあさましくあきれて(右近は昨夜の殿が大将ではなく兵部卿だったと知り、驚き呆れて)、心もなかりける夜の過ちを思ふに(全く気付かなかった昨夜の不注意を思うと)、心地も惑ひぬべきを(気も動転しそうな所を)、思ひ静めて(思い鎮めて)、*「いとあさましくあきれて」は注に<主語は右近。初めて匂宮であったことを知る。>とある。従者への指示を命じる前に、宮自身が右近に正体を明かしたのだろうが、その場面の描写は無い。顔を曝して知ら

せたのかも知れないし、昨日の男は私だと言葉にしたのかも知れない。とにかく、事情説明も無しに従者の指示だけを宮が告げたとは思えず、それだけで万事が了解できるような普通の事柄でも無い。それなりの話が匂宮から右近に告げられたに違いないが、大幅に省かれている、と考へざるを得ない。当時の宮廷読者なら、その辺の遣り取りの次第は、日常業務に照らして、およそ具体的に類推出来たのだろう。が、私にはまるで覚束無い。

「今は、よろづにおぼほれ騒ぐとも(今は何かと騒ぎ立てても)、かひあらじ*ものから(どうにもならないことだし)、*なめげなり(みっともない)。あやしかりし折に(二条院で不意に出会った時に)、いと深う思し入れたりしも(宮が姫をとて深く思い入れなされたというの)、かう逃れざりける御宿世にこそありけれ(このように逃れられない御宿命にあったからだ)。*人のしたるわざかは(誰が防げるものでもない)」 *「ものから」はくものながら、ものゝ>という逆接の接続助詞語用が多いらしいが、此処での「から」はく〜だしなあ>と手詰まり感を示す間投助詞語用に聞こえる。この語用は、理由・原因・手段を示す格助詞語用が元にあつて、しかしそのように示された事態に対して特に有効な対処が無いままに、その状況認識だけをしている、という場面は実生活では良くありそうで、そういう時に使うような気がする。とにかく、下文が「なめげなり」なので逆接ではく(騒ぎ立てるのは)有効ではないのだが、無作法めく>みたいな言い方となって文意が成立しないし、かといって、この「から」に<だから>と説得意を持たせればく有効ではないから、無作法めく>となるが、「かひあらじ」と「なめげ」との因果関係が遠すぎる。だから、この「ものから」の「から」は他節に影響しない独立意の助詞と見る他は無く、此処の構文は「騒ぐとも」が「かひあらじ」と「なめげなり」のそれぞれに掛かると見るべきで、文意はく騒いでも無駄だし見苦しい>となる言い方だろう。 *「なめ」はく無礼だ。無作法だ。>と古語辞典にある。ナメンナヨ!はバリバリの現代語だ。ただ、此処の「なめげ」の「げ」の語感はく宮や姫に対して失礼に当たる>というよりは、騒ぐ事が無作法じみた事態になるという<場のみっともなさ>を言っている、ように聞こえる。それにこの事態だが、二人の情事の露見は宮にとってはいくらかの失態程度だが、姫にとっては非礼とか過失とか不注意とかいう言い方で済むような話ではない、というのが実際のところだろう。 *「人のしたるわざかは」は反語だからく人間業ではない→誰も防げない>だが、大将に化けて姫を犯したのは兵部卿で、犯人は兵部卿だ、とはっきりしている。が、この貴人、というか親王を、一体誰が裁けるのか。裁くとしたら、天皇しかいないではないか。しかし天皇は三の宮の御乱行を注意することはあるにせよ、地方官の娘を守るなどといった秩序を乱すようなことは、しないし出来ない。だから実際の所、確かに誰も防げない。が、今回の山荘場面での語りを書く限りは、姫を守り管理する立場の筆頭女房は右近らしく、こういう右近の発言は管理者の責任放棄の言い逃れだ。いや、だがしかし実際の所、宮を止めることなど右近には出来ない。そして、姫も出来なかった。だから、この<天命だ>といった方便は、実社会の様相に照らせば、とても便利で気が利いている。私としては、姫自身も早くこういう開き直りに立って欲しいと願うばかりだ。

と思ひ慰めて(と自分を納得させて)、

「今日、*御迎へにとはべりしを(今日は京の奥様から御迎への御車が遣される予定でございますが)、いかにせさせたまはむとする御ことにか(このことについては、どうなさる御考えでしょうか)。*かう逃れきこえさせたまふまじかりける御宿世は(こうして宮様と一夜を共に為された姫君を、逃れ申し為されなさそうな御宿命とは)、いと聞こえさせはべらむ方なし(私からはとても奥様に申し上げられません)。折こそいとわりなくはべれ(間が悪過ぎます)。なほ、今日はおはしまして(やはり今日はお帰りあそばして)、御心ざしはべらば(姫君への御心ざしがございますなら)、のどかにも(また日を改めて、ゆっくりお越し下さい)」 *「おおんむかへにとはべりし」は注に<浮舟の母が京から迎えに来る予定であった。>とある。「母が京から迎えに来る」とは初耳で、昨夜の女

房の話では<母君が迎えの車を遣す予定>だったかと思う。まあ細かい点はともかくも、此処に書かれた限りでは、右近は匂宮に詳しい事情を話してはいないが、直面で話しているのだから実際は、御迎えは京の母君から遣わされる御車で、石山詣でと場合によっては里帰りをする予定だ、という説明はしたのだろう。そういう説明に大した時間は掛からないだろう。ということは、姫が前常陸守家の令嬢で再婚相手の連れ子だという素性も、二条院の御方の義妹に当たるという王家血筋の事情も、一通りではあろうが、この時に右近が匂宮に話した、という可能性も高い。*「かう逃れきこえさせたまふまじかりける御宿世」という言い方は、右近が今の事態をそのように考えたということだが、そういう理解の仕方をそのまま兵部卿宮本人に申し上げる、というのは、例えば<斯くなる次第>と言う方がよほど平易で穏便で普通のように思うが、是の方がより優れた表現だと判断した、というもう一段上の判断に基づく右近の発言、ということになるのだろう。ただ、私には女房が宮に事態の解釈を示すという姿勢自体が僭越に思えるし、この表現を良しとする判断の正否も分かり難いし、この表現で発言するという判断の正否も分かり難く、如何して作者は右近にこの発言をさせたのかも分かり難く、延いてはこの発言の場面文意まで分かり難い。当時の事情を知らない私には、この場面状況を想定することさえ相当に難しいのに、それに加えて、こういう分かり難い言い回しをされては本当に難儀する。

と聞こゆ(と申し上げます)。「*おやすけても言ふかな(分かった風なことを言うものだ)」と
思して(と匂宮はお思いになって)、 *「おやすく」は大辞泉に<〔動カ下二〕《「す」「く」の清濁はともに未詳。連用形の例だけがみられる》>と説明され、用例は<成長する。成人する。>または<大人ぶる。ませる。>または<じみである。老けた感じである。>とある。此処の「おやすけて」は<大人ぶって→分かったように>くらい
の言い方のようだ。恐らく、この「おやすけても言ふかな」は右近の言った「かう逃れきこえさせたまふまじかりける御宿世は、いと聞こえさせはべらむ方なし」に対する宮の感想なのだろう。この<抗えない天命>という言い方は免責を願う右近にとっては実に都合の良い考え方だが、実際に姫を犯した匂宮にしてみれば<避けられない>という被害者意識を滲ませた言い方に、面と向かってではないにしても、どこか非難がましい響きを感じずには居られないのではないだろうか。下文もその非難を意識した抗弁のように聞こえる。

「我は、月ごろ思ひつるに(私は何ヶ月も姫を思い続けて)、ほれ果てにければ(惚れ込んでいたので)、人のもどかむも言はむも知られず(人が非難するのも注意するのも気付かず)、ひたぶるに思ひなりにたり(一途に思い詰めてしまっている)。すこしも身のことを思ひ憚らむ人の(少しでも分別が付いて自重する者なら)、かかるありきは思ひ立ちなむや(このような出歩きは思い立たない)。御返りには(御迎えを御返しするには)、『今日は物忌(けふはものいみ、今日は謹慎日
で外出できない)』など言へかし(と云えば良いだろう)。人に知らるまじきことを(昨夜の事が他言無用なのは)、誰がためにも思へかし(誰の為なのか考えなさい)。異事はかひなし(他の事はどうしても良いことだ)」

とのたまひて(と右近に仰って)、この人の(姫が)、世に知らずあはれに思さるるままに(またとなく愛しく思われなされるままに、後はまた閨に戻って情事に耽りなされて)、よろづのそしりも忘れたまひぬべし(どんな非難も忘れなされてしまうようです)。

[第六段 右近、匂宮と浮舟の密事を隠蔽す]

右近出でて(右近は御部屋を出て)、このおとなふ人に(御帰りを促す合図の音を立てていた宮の従者たちに)、

「かくなむのたまはするを(宮様はこのように思い詰めた恋路に邪魔立ては無用とおっしゃいますが)、なほ、いとかたはならむ、とを申させたまへ(やはり、とても不都合なことだ、とあなたの方から申し上げてください)。あさましうめづらかなる御ありさまは(軽薄で異様なこの宮様の御振る舞いは)、さ思しめすとも(宮様がそうお考えになったにせよ)、かかる御供人どもの御心にこそあらめ(このように御供するあなた方の御協力で実現しているのです)。いかで、かう心幼うは率てたてまつりたまふこそ(どうしてこうも大人気なく宮様をお連れ申しなさいましたか)。なめげなることを聞こえさする山賤などもはべらましかば(夜の山道で不届きなことを仕出かす山賊などが現れたら)、いかならまし(どうなっていたことか)」

と言ふ(と言います)。内記は、「*げに、いとわづらはしくもあるかな」と思ひ立てり(内記はこの宇治行を安易に考えていたが、昨夜の山越えの大変さとこの右近の言葉から、確かに何かあれば大問題だ、と思い直しました)。*「げに」は右近の指摘を尤もだと納得して<なるほど>と思った、という言い方だ。では、内記は右近の発言の何処に納得したのか。恐らくだが、それは「山賤などもはべらましかばいかならまし」と思う。内記は兵部卿に宇治行きを相談された時に、「いと荒き山越えになむはべれど、ことにほど遠くはさぶらはずなむ」(一段)と答えていた。取り入りたい気持からか、無知からか、夜の木幡山越えを安直に考えていた節がある。しかし、実際に昨夜の山越えで、その危険性を実感したのだろう。内記は一段でも、兵部卿の相談を「あな、わづらはし」と思ったが、その時の「わづらはし」は<面倒臭い>だ。しかし、此処での「わづらはしくもあるかな」は<問題だ>だ。なぜなら、「げに」は<もし山賊に襲われでもして、兵部卿に災難があれば、取り入るところか責任を取らされるし、下手をすれば自分の命も無いかも知れない>ということだし、その危険性を話の上のことではなく実感した、という恐怖が今はあるのだろう。で、「思ひ立つ」は<決心する>という語用が多いようだが、此処では<新たに考え起こす→考え直す>ということだろう。

「時方と仰せらるるは、誰れにか(時方と仰るのは何方ですか)。さなむ(このように御指示がございました)」と伝ふ(と右近は時方に京へ戻って手筈を整えるように伝えます)。

笑ひて(宮の御指示を承った時方は笑いながら)、「笑ひて」の主語は時方だろうが、是が場面としては初登場なのに主語の明示が無い。非常に違和感を覚える語り口だ。脱稿すら疑わしい。ただ、右近の話に気を引き締めて襟を正したらしい内記に比して、この「笑ひて」は如何にも軽々しい人物像を表現してはいそうだ。

「*勘へたまふことどもの恐ろしければ(あなたの御叱りが恐ろしいので)、さらずとも逃げてまかでぬべし(宮様の御命じが無くても退散いたします)。まめやかには(まじめな話)、おろかならぬ御けしきを見たとまつれば(ただならぬ宮様の入れ込みようを押し申せば)、誰れも誰れも(我々は皆)、身を捨ててなむ(命懸けで御供申しています)。よしよし(とにかく、宮様の御言い付けは承知しました)、*宿直人も、皆起きぬなり(宿直人も皆起きたようですから、我々は目立たぬようにしていきましょう)」*「勘ふ」は「かんがふ」で「考ふ(考える)」でもあるが、「勘ふ」と漢字表記する場合は<(規範に照らして)咎める。勘当する。>という語用であるらしい。主語は右近、と注にある。*「とのみびともみなおきぬ」は<当家の警護要員が配置に付いたので、宮の供人たちは休息を取れる>ということなのだろう。また、宮の指示は「男どもは、このわたり近からむ所に、よく隠ろへてさぶらへ」(五段)とあったので、供人たちは目立たぬように休むのだろう。

とて急ぎ出でぬ(と言って急いで京へ立ちました)。

右近、「人に知らすまじうは、いかがはたばかるべき」とわりなうおぼゆ(右近は、女房たちに宮の御ことを知らせないようにするには、どう誤魔化したものか、と困ります)。人びと起きぬるに(女房たちが起き出して来たので)、

「*殿は、さるやうありて(旦那様は何か訳があつて)、いみじう忍びさせたまふけしき見たてまつれば(厳しく人目を避けていらっしゃる様子で、訳をお聞き申しますと)、道にていみじきことのありけるなめり(道中でひどく汚れてしまいなさったそうです)。御衣どもなど(着替えの御衣装などを)、夜さり忍びて持て参るべくなむ(夜になってから密かに持って来るように)、仰せられつる(御供に申し付けなさいました)」 *「との」という尊称は広く貴人に対して使われるので、是をく大将殿>と解すのは聞き手の都合であつて、発言者の右近は偽つてはいない、というのが普通だが、兵部卿は親王なので一般尊称で呼ぶにしても<宮>と言わなければ虚偽となるのかもしれない。が、いずれにしても、右近が他の女房たちの誤解を期して発言していることに変わりはない。だから、その右近の意図を汲んで、全くの虚偽とはならなさそうなく旦那様>という語を使って置く。ただ、汚れたから人目を避ける、という事自体は妥当だが、だから表に出来こないというのなら分かるが、だから人払いするというのは説得力があるのだろうか。そういう時に身の回りの世話をするのが女房たちではないのか。それに、本物の大将なら山荘に着替えの無い筈もなく、まして夜陰に紛れて運ばせるほどの衣装が山荘で必要だろうか。参内の為の正装なら京へ戻ってから着替えるだろうし、この右近の言い方で女房たちが納得できたのかは、私には疑問だ。が、理由の妥当性はさて置いて、殿が人払いしている、ということだけは伝わったのだろう。

など言ふ(などと言って、人払いを企みます)。*御達(上臈たちが)、 *「御達(ごたち)」は<宮中・貴族の家に仕える上級の女房たちを敬つていう語。>と大辞泉にあり、補足に<複数でなく一人の場合もある。>とある。

「あな、むくつけや(ああ嫌だ)。*木幡山は、いと恐ろしかなる山ぞかし(木幡の山越えはとても恐ろしい山道なんですな)。例の、御前駆も追はせたまはず(いつもの先導もお付けにならず)、やつれておはしましけむに(狩衣姿で御馬でいらしゃったというのだから)、あな、いみじや(まあ、大変でしたね)」 *「木幡山(こはたやま)」は何度か語られていて、大辞泉には<京都府宇治市木幡(こはた)町を中心として山科あたりまでを含んだ地域の古称。〔歌枕〕>とある。ところで、JR奈良線だと京都駅から木幡駅は六つ目、宇治駅が八つ目、宇治駅から上れば黄檗(おうばく)の次が木幡で二つ目。ユーチューブに「JR奈良線 宇治駅～木幡駅」の運転席動画がアップされていて見てみたが、宇治から黄檗までは平坦で、黄檗から木幡はいくらか勾配を登る感じ。何より山に向かって行く画像だ。

と言へば(と言うと、右近は)、

「あなかま、あなかま(静かになさい)。下衆などの(下級侍などが)、ちりばかりも聞きたらむに(旦那様のお忍びを少しでも聞きつけたら)、いといみじからむ(余所で何を言い触らすか知れず、とても困ります)」

と言ひあたる(と言っているのも)、心地恐ろし(単に方便の辻褃合わせではなく、昨夜の宮の御来訪が外へ洩れることが、本当に恐ろしい気がします)。あやにくに(折悪しく)、殿の御使の

あらむ時(こんな時に大将殿の御文使いでも来たものなら)、いかに言はむと(どうにも取り繕えないだろうと)、

「初瀬の観音(長谷観音様)、今日事なくて暮らしたまへ(どうぞ今日一日無事に終わりますように)」

と、大願をぞ立てける(と切望しました)。

石山に今日詣でさせむとて(石山寺に今日、姫君を参詣させようと)、母君の迎ふるなりけり(母君が迎えに来る日なのでした)。この人びともみな精進し(この女房たちも皆昨夜から精進料理を食し)、きよまはりてあるに(入浴して身を清めていたので)、

「さらば(殿がお見えでは)、今日は、え渡らせたまふまじきなめり(今日はお出掛け為されないのでしょうね)。いと口惜しきこと(とても残念です)」

と言ふ(と言います)。

[第七段 右近、浮舟の母の使者の迎えを断わる]

日高くなれば(日が高くなったので)、格子など上げて(半部の格子窓を上げ開けて)、右近ぞ近くて仕うまつりける(右近が姫の御側近くで控え申します)。母屋の簾は皆下ろしわたして、「物忌」など書かせて付けた(母屋の簾は皆下ろし廻らせて「物忌」と書いた紙を付け下げてあります)。母君もやみづからおはするとて(遣いの者なら御前に通すこともないが、もし母君が自らお越しなさる時には、この貼り紙で)、「夢見騒がしかりつ(姫君の夢見が悪かったので、謹慎なさっています)」と言ひなすなりけり(と言ひ做すためなのでした)。

御手水など参りたるさまは(洗面水を御簾内にお運び入れ申すのは)、例のやうなれど(いつもと同じ作法だが)、*まかなひめざましう思されて(宮は御前に運ばれた洗面桶が大将の専用品である事に嫌気されて)、「*そこに洗はせたまはば(あなたがお使いになったら、その桶を私も使いたい)」とのたまふ(と姫に仰います)。 *「まかなひ」は<目的に適うように給仕すること→実際の給仕方法>を言うようで、此处ではほぼ与謝野訳文の解釈に習って<大将専用の洗面桶が宮に提供されたこと>と読んで置く。 *「そこに洗はせたまはば」は注に<句宮の詞。「そこ」は浮舟をさす。『集成』は「あなたがお洗いになったら(そのあとで私が)」。『完訳』は「あなたが先に、と譲る。その心やさしさが、浮舟を感動させる」と注す。>とある。が、確かに是は「そのあとで私が」という言い方ではありそうだが、宮は何も「あなたが先に、と譲る」のではなく、自分用に用意された桶が薫君用の物なので使いたくなかった、ということらしい。だから、姫の御前に用意された桶を使いたいから、あなたが使ったその桶を此方へ回してくれ、と言ったのであり、それは結果として「そのあとで私が」使うことになる、に過ぎない。のだが、このことを姫が宮の深い愛情と感じ入った、のは下に「心ざし深しとは、かかるを言ふにやあらむ」と姫の内心文があることから確からしいが、それはどうも宮の「心やさしさ」とは違うようで、それを「その心やさしさ」と姫が思ったのは誤解であり、そういう誤解をするほど宮の性戯は情熱的で、姫も絆されていた、という筆致になりそうだ。

*女(宮の女として抱かれた姫は)、*いとさまよう心にくき人を見ならひたるに(とても行儀良く遠慮深い大将を見慣れているので)、時の間も見ざらむに死ぬべしと思し焦がるる人を(少しでも会えないと死んでしまうと思し焦がれなさって留まっていらっしゃる宮を)、「心ざし深しとは(情け深いとは)、かかるを言ふにやあらむ(こういう人をいうのだろう)」と*思ひ知らるるにも(と夢心地にしてくれた宮の情熱に女冥利を思い知らさせるものの)、「あやしかりける身かな(大将の女でありながら兵部卿に抱かれるとは、不思議な運命だ)。
*誰れも(御世話下さる方々は誰もが)、ものの聞こえあらば(このことを知れば)、*いかに思さむ(さぞ私をだらしなない女とお思いになることだろう)」と、まづかの上の御心を思ひ出できこゆれど(と、中でも先ず宮夫人である二条院の御方様を思い出し申したが)、 *「をんな」は注にく『完訳』は「恋の場面を強調する呼称。以下、この呼称の多出する点に注意」と注す。>とある。この呼称からも、姫が匂宮を受け入れて、この閨の場で女として振舞っている事が示されているのだろう。ただ、その立場をどのくらい、またどのように自覚しているのかは何ともあやふやだ。 *「いとさまよう心にくき人」は注にく薫をいう。『集成』は「一分の隙もなく奥ゆかしい人」。『完訳』は「好ましく奥ゆかしい人」と訳す。>とある。「さまよし」は< [形ク] みめかたちが美しい。見た目がよい。>と大辞泉にある。「こころにくし」は深い配慮に感じ入った時の<特に、上品な深みを感じ、心ひかれるさま。>などともある。ただ、此处では宮の濃厚な性戯に比した大将の淡泊さを言っているのだから、むしろ否定的な語感の<取り澄まして余所余所しい人>くらいの思いを込めて<とても行儀良く遠慮深い人>と取って置く。 *「思ひ知らるる」は情事の快樂実感を示す言い方で、それだけに意味深で重要な表現なので、明示は情緒を損なう嫌いはあるが、この語用の意味を取り損なっては読んだ甲斐が無いので、敢えて補語する。 *「たれも」は述語が「いかに思さむ」と敬語遣いなので、薫大将と対の御方と母君あたりを指すのだろう。 *「いかに思さむ」は、是だけなら<如何お思いになるだろう>だが、「たれも」は<御世話下さる保護者の方々>なので、この「いかに」は漠然とした<如何に>ではなく<どんなに情けなく>という言い方だろう。

「*知らぬを(其方の実父を聞き知らぬのが)、返す返すいと心憂し(今ひとつ正体が掴めず、つくづく心許無い)。なほ、あらむままにのたまへ(是非、正直に教えてくれ)。*いみじき下衆といふとも(養父の常陸守のような受領にさえ及ばない、ひどく下層な父親だとしても)、いよいよなむあはれなるべき(蔑むどころか、ますます其方の苦労が偲ばれます)」 *「知らぬを」は注にく以下「あはれなるべき」まで、匂宮の詞。浮舟の素姓を知らないの。なお、『集成』は「返す返す」から匂宮の詞とする。>とある。が、此处に至って「素姓を知らない」というのは、少なくとも<全く知らない>というの、有り得ない。で、良くは知らないものとして、宮は何を知っていて何を知らないのか。常陸姫がこの宇治山荘に居る、ということについては、大将がこの姫を此处に連れ込んだから、だと宮は理解していて、宮は姫が常陸守の娘だとは知らない、ということだろうか。しかし、今日は実家から迎えの車が遣されると右近は言っているし、その為に「物忌み」の貼り紙までして、その実家が常陸守家だと聞いていないなどということは、絶対に有り得ない。それに宮は去年の八月に二条院から帰る常陸殿の車を見掛けていて、むしろ諸事情は符合したのではないか。そして、その常陸殿が対の御方の親戚らしい事柄が幾つかあって、四段には「何ばかりの親族にかはあらむ」と姫を御方の親戚と宮は実感していた。実際に常陸殿は御方の大叔母に当たる。そして、この時点では更に姫がその母君の連れ子だと宮が聞き知ったとして、残る疑問は実の父親が誰なのか、ということだけではないのか。尤も、姫の実父の話も今までには何処かから少しは漏れ聞いていそうな気もするのだが、此处で宮が姫の素性の何かを「知らぬ」のは確かなんだし、実父の件は当の八宮が認知さえしていたら当然に公表されるべき誇らしい血筋だが、認知しなかったのだから、むしろ惨めな血筋として本人周辺も基本的には隠す裏事情で、限られたごく少数の者しか知らないし、誰も今まで宮には知らせていない、ということは大いに有り得るような気もする。それに、宮が未だに知らなさそう

な事柄は其以外には思いつかない。そして、それはまた姫が対の御方の義妹に当たるという事情であり、上文で対の御方が引き合いに持ち出された話運びに此処の文意が上手く繋がる、という語り口でもある。つまり符合する。だから左様に明示補語する。 *「いみじきげす」は<末端の役人>あたりを指すのだろうか。匂宮は姫の養父が常陸守であることは分かっているはずだ。そして、地方官とは言え大国の受領である常陸守を、そして姫の養父を、いくらなんでも面と向かって「いみじ」とまでは言わないだろう。で、母君の守夫人が対の御方の母方の親戚で常陸守と再婚しており、姫がその連れ子だということは公然とした事情なので、宮も其処までは十分聞き知り得る。となると、この「いみじき下衆」と宮に疑われるのは、守夫人の前夫に当たる<姫の実父>のこととしか思えない。

と、わりなう問ひたまへど(と匂宮は頻りに姫の実父をお尋ねになるが)、その御いらへは絶えてせず(姫はその事は決して答えません)。異事は(他の事は)、いとをかしくけちかきさまにいらへきこえなどして(とても可愛らしく親しげにお答え申して)、なびきたるを(身を任せる姫を)、いと限りなうらうたしとのみ見たまふ(匂宮はこの上なく愛おしくてならないとお思いになります)。

*日高くなるほどに、迎への人來たり(日が高くなった時分に姫の迎への人が京から遣って来ました)。車二つ(車が二台に)、馬なる人びとの(馬上の人が)、例の、荒らかなる七、八人(いつものように荒々しい侍の七、八人)。男ども多く(その他、徒歩の従者が多く居て)、例の、品々しからぬけはひ(例によって下品な東国者風で)、さへづりつつ入り來たれば(がやがやと話しながら邸内に入って來たので)、人びとかたはらいたがりつつ(女房たちは殿の手前に極まり悪がりながら)、 *「日高し」は、太陽が空高く昇っている<日中だ>ということだが、現代語で使う「日が高い」は<まだ日が高い>とか<日の高い内から>とか<日の高い内に>とか、夜を意識した逆の時間帯を示す語用が多く、大体昼過ぎから夕方までのことで、あまり「日が高くなる」とは言わない気がするが、それでも私が小さい時、というと今から50年前くらいまでは、「日が高くなる前に」と朝の時間を意識した言い方なり気分なりは今よりずっと強かったような気もする。まして、電灯の無い当時の生活感からすれば、夜の暗さには活動が極端に制限されて、且つそれに抗し得ないので、日が高くなってからは一日の終わりが意識されて、むしろ諦観気分からのんびり残務をこなす時間で、日が高くなる前に多くのことを片付けるのが望ましいし、それまでが気忙しいので、「日高し」の時間帯は午前から昼過ぎまでくらいを言っていたのかも知れない。だから、「日高くなるほど」は午前8~10時あたりのことのような気がするが、昼前くらいのことかも知れず、どうも分からない。

「あなたに隠れよ(向こうで目立たなくしていなさい)」と*言はせなどす(と下侍などを通して迎へに従者たちに注意させます)。 *「言はせなどす」は注に<『集成』は「女房が直接言うのではなく、下働きの者を通じて伝えさせるので、こう言う」と注す。>とある。従って補語する。

右近(右近は)、「いかにせむ(どうしたものか)。殿なむおはする(殿がお見えなっている)、と言ひたらむに(と言ったとすると)、京にさばかりの人のおはし、おはせず(京に大将ほどの要人がいらっしゃるかどうかは)、おのづから聞きかよひて(すぐに分かることなので)、隠れなきこともこそあれ(隠し遂せない)」と思ひて(とあって)、*この人びとにも(迎へへの使者たちにも)、ことに言ひ合はせず(わざわざ大将殿の御訪問を理由立てにすると申し合はせず)、返り事書く(奥様への御連絡文を書きます)。 *「この人びと」は<この山荘の女房>と訳文にあるが、「言ひ合はず」は<申し合はす→状況確認を取る>で、今さら女房たちに余計なことを話すのは危険なばかりで不必要なので、是は<「迎への人」=遣いの責任者>にいつそ一切事情を話さない、という文意だろう。

「昨夜より*穢れさせたまひて(昨夜から姫君がオリモノをなさいます)、いと口惜しきことを思し嘆くめりしに(参詣出来ないとともに残念に思い嘆きなさいていらしたようですが)、今宵、夢見騒がしく見えさせたまひつれば(その上昨晩は夢見が悪くいらっしゃいます)、今日ばかり慎ませたまへとてなむ(本日は一日謹慎なさるということで)、物忌にてはべる(物忌みして居ります)。返す返す、口惜しく(返す返すも残念で)、ものの妨げのやうに見たてまつりはべる(今回の石山詣では取り止めにすべき知らせのように入れ申します)」 *「けがれ」は注に<生理の意。血を穢れとして忌んだ。>とある。

と書いて(と書いて)、人びとに物など食はせて*やりつ(右近は迎えの人びとに食事をさせて帰しました)。尼君にも(弁尼にも)、「今日は物忌にて、渡りたまはぬ(今日は物忌みなので、姫君は外出なさいません)」と*言はせたり(と右近は女房から知らせたのでした)。 *「遣りつ」はく送り返した。 *「言はせたり」は注に<浮舟の母君への伝言。>とある。確かに、第一線を退いたとは言え、弁尼は別格の重鎮なので、右近は相談に向いて頼った、のかもしれないが、この「言はせたり」の語調は右近の弁尼への使役にしては雑に過ぎる語感で、もう少し敬意が示されないと不自然に感じられるので、取り敢えずこの時点では、右近が他の女房から弁尼に姫の不外出を知らせた、という文意に取って置く。

[第八段 匂宮と浮舟、一日仲睦まじく過ごす]

例は暮らしがたくのみ(常日頃は閉じ込められた孤独感ばかりで)、霞める山際を眺めわびたまふに(霞み立つ山際を眺めて思い沈んでいらっしゃる姫は)、暮れ行くはわびしくのみ思し焦らるる人に惹かれたてまつりて(日が暮れ行くのを別れが近づく侘しさとばかり思い急かされてばかりいらっしゃる宮に共感させられ申して)、いとはかなう暮れぬ(この日はとても早く暮れてしまいました)。*紛ることなくのどけき春の日に(誰にも邪魔されない長閑な春の日に)、見れども見れども飽かず(宮の目には姫は、いつまでも見飽きず)、そのことぞとおぼゆる隈なく(どこといって欠点の無く)、愛敬づきなつかしくをかしげなり(愛らしく打ち解けて風情があったのです)。 *「紛る(まぎる)」は<他事に紛れる→忙しい→他人に邪魔される>という言い方らしい。姫は「眺めわびたまふ」のだから、是は匂宮の視線を示す言い方、ということのようだ。

*さるは(しかしその実)、かの対の御方には似劣りなり(この姫はかの対の御方には見劣りしていました)。大殿の君の盛りに匂ひたまへる*あたりにては(源大臣の六姫が華やかさを振りまいていらっしゃる六条院であつたら)、*こよなかるべきほどの人を(埋もれて目立たないほどの人を)、たぐひなう思さるる*ほどなれば(匂宮は特別な場所に思われなさる宇治でのことなので)、「また知らずをかし(誰よりも美しい)」とのみ見たまふ(とばかり思いなさいます)。 *「さるは」は注に<『全集』は「語り手の言葉。恋に盲いた匂宮の心に即した叙述をひるがえし、その主観的偏向を読者に気づかせる筆づかい」。『完訳』は「前述から翻った語り手の評言」と注す。>とある。 *「あたり」は場所を示すので、此处で言う場所は六条院ということになる。 *「こよなし」は<この上なく>と言い換える事が多いので、程度が悪い場合の語用には馴染み難いところが私にはあるが、此处では否定意のようだ。ただ、この「こよなかるべきほど」は<甚だしく劣っている>という言い切りではなく<抜き出てはいない程度>くらいの語感だ。 *「ほど」は<程度>をいう語用が多いが、状況やロケーションの性質や意味を言う語用もあって、此处では宇治山荘の風情や、何より大将の女を寝取った征服感を言っているのだろうが、かといって、それと特定できる単純な意識というよりは、大将が宇治にこだわる理由に何か感付いているのか、少なくとも何か秘密があるだろうとの疑いがあつたり、そ

ういう背景も在って対の御方に特別な存在感を覚えたり、またこの姫の素性に興味を引かれたりと、兵部卿なりに複雑な思いもあっての、この日この時だろうし、また<程度>の比較という文意で見ても比較対象は六条院と明示されてもいるので、やはり<宇治>という場所を「たぐひなう思さる(宮は特別に思えなさる)」と読んで置く。

女はまた(姫は女心に実は)、大将殿を、いと*きよげに、またかかる人あらむやと見しかど(大将殿をととも美男子で他にこのような人はいないだろうとと思っていたが)、「こまやかに*匂ひきよらなることは(情け深く際立つ男らしさは)、*こよなくおはしけり(兵部卿の性愛が格別でいらっしやっつた)」と見る(と知りました)。 *「きよげ」は<清らしい見た目>で、宮の「きよらなる」という実体実感との比較は印象的だ。 *「にほひ」は<匂立つ男臭さ=精液臭や逞しい男根>のことで、「きよら」は<すっきり、さっぱりしている>ではなく<際立っている>だ。 *「こよなくおはしけり」は注に<「おはしけり」の「けり」は詠嘆の意。>とある。匂宮の性戯の巧みさ、または性欲の強さへの実感だろう。とにかく、この作者は王家の性を高らかに謳う。王家血筋でも、臣籍となった光君や源大臣や薫君の性は、どんなに情緒深くても、どこか弱弱しく描くか、描くに値しないのか描かない。実相だろうか。

硯ひき寄せて、手習などしたまふ(宮は硯を引き寄せて遊び書きを為さいます)。いとをかしげに書きすさび(全く気ままに書き進めて)、絵などを見所多く描きたまへれば(絵などを面白くお描きになったので)、*若き心地には(姫は乙女心に)、思ひも移りぬべし(興味を引かれたようです)。 *「若き心地」は注に<『完訳』は「浮舟は二十二歳」と注す。十分な成人である。>とある。尤もで、だから<幼心>とは言い難い。

「心より外に(思うに任せず)、え見ざらむほどは(会えない時には)、これを見たまへよ(是を見て下さい)」

とて(と言って)、いとをかしげなる男女(とても風流な男と女が)、もろともに添ひ臥したる画を描きたまひて(抱き合って添い寝している絵をお描きになって)、

「常にかくてあらばや(いつもこうしていられたらなあ)」

などのたまふも(などと宮は軽口めかして仰りながらも)、*涙落ちぬ(涙が落ちます)。 *「涙落ちぬ」は「涙」が形式主語なので敬語遣いにはならないらしく、注には<『集成』は「匂宮は」。『完訳』は「女は涙がこぼれた」と注す。>とある。専門家でも分かり難いとは全く厄介な紛らわしい書き方だ。ただ、下文の歌とそれに続く発言は匂宮のものなので、この場面は宮一人のクローズアップで姫に振ると集中が途切れて、画面の緊張感が損なわれるから、是は宮の涙だろう。となると、「のたまふも」の「も」の逆接の効果を強める為に、「のたまふ」に<軽口調>という演出を補語したくなる。

「長き世を頼めてもなほ悲しきは、ただ明日知らぬ命なりけり (和歌 51-02)

「明日知れず 立てた誓いの 頼りなさ (意識 51-02)

*「長き世を頼む」は<愛を誓う>よりは<長く人生の頼りとする→ずっと生活の面倒を見る→結婚する>という言い方で、まだこの時点で姫を如何処遇するということろまでは行っていないかと思うが、二人の仲を宿命と思って<変わらぬ愛を誓う>という言い方ぐらいにはなるのかも知れない。そう思えばロマンチックか。それにしても、「た

だ明日知らぬ命なりけり」は唐突だ。それらしい前振りも無かったと思うが、この歌が後の展開の前振りであるかのような、口から出たことは本当に起こる、という不気味な不吉ささえ感じさせる。

*いとかう思ふこそ、ゆゆしけれ(全くこんな風に思うのは不吉だが)、心に身をもさらにえまかせず(会いたくても身分柄この身がまったく思うに任せず)、よろづにたばからむほど(いろいろ思い悩む内に)、まことに死ぬべくなむおぼゆる(本当に死んでしまいそうな気がする)。*つらかりし御ありさまを(かつて連れなかった貴方を)、なかなか何に尋ね出でけむ(却って辛くなるのに、如何して捜し出してしまったのだろうか)」 *「いとかう思ふこそゆゆしけれ」と宮自身が<不吉だ>と言っているが、そう思うのなら、決して口から出してはいけない言葉、というものはあるのかもしれない。私は何も物の怪を信じるわけではないが、想念を言葉にして客体化すると、物事を非常に具体的に検討できるので、その実現に道が開ける。それが新しい概念を言葉にすることの大きな意義の一つのような気がするが、であれば、不吉な予感に口にしなない方が無難ではないのか。尤も、それが頭に浮かんだ時点で、二度と打消せない強い印象が植え付けられてしまって、言葉にするのはただその結果でしかないのかも知れず、だとしたら、やっぱり抗えない天命なのだろうか。なお、この「ゆゆしけれ」の係り結びは、構文としては結び切らず読点で下文に続き、文意としては逆接する反意対象の一考察提示項を成す。 *「つらかりし御ありさまをなかなか何に尋ね出でけむ」も、姫に対して口にするのは勝手な言い種に過ぎる。本心かも知れないし、別れを惜しむ情緒を伝えたかったのかも知れないが、宮は丸で騙し討ちのように姫を抱いたのであり、しかし王家の秘儀で姫を夢中にさせたという罪深さであって、今さら悔やむような言い方は冗談にも言えないだろうに、言ってしまう軽率さ。姫はそれを笑って受け止めるほど世慣れていないだろうし、世慣れていない初々しさが可愛いのだろうに、やはり匂宮は薫君とは違って光君譲りの下半身のだらしなさで、この狂言を回すか。

などのたまふ(と宮は仰います)。*女(姫は女心に)、濡らしたまへる筆を取りて(宮が涙混じりに墨を含ませて濡らした筆を受け取って)、 *「女、濡らしたまへる筆を取りて」は女学生に声に出して読ませるのも罪深いほど卑猥な文、と考えると楽しいが、作者がそれを意識しなかった、などとは絶対に信じない。

「心をば嘆かざらまし、命のみ定めなき世と思はましかば」(和歌 51-03)

「本当に 定めなき世の 命なら」(意訳 51-03)

*注に<浮舟の返歌。「命」「世」の語句を受けて返す。『完訳』は「「--ましかば--まし」の反実仮想の構文で、倒置法。命の移ろいやすだけの世だとしたら、として、宮の不訪の言い訳を恨む歌」と注す。>とある。この歌で分かり難いのは、「命のみ」の「のみ」の語用だ。「のみ」は古語辞典に<語源は「の身」で、英語の itself に相当するような強調の語か>という参照考察があり、であれば、必ずしも限定強調の<～だけ、ずっと～ばかりだ>という意味ではなく、指定強調の<まさにそれこそ>という副助詞かもしれない。というか、既にこの語は何度かそのように読んで来た様な気もするが、此処でも「命のみ」は<命だけが>ではなく<命こそが>という言い方で、むしろ<命すら、命でさえ>に近い語感だろう。だから、「命のみ定めなき世と思はましかば」は<命さえどうなるか分からないこの世と思えるのだったら>で、反実仮想というよりは、もしそれが本当にあなたの言うように実現するなら、という懐疑仮想というか、ざっくりいえば皮肉口調で、もっといえば非難や反論の言い方に聞こえる。そこで、「心をば嘆かざらまし」は贈歌に対してなら<悲しむことはない>で、添え句に対しては<悩むことない>と、宮を慰めているようにも聞こえるが、それは、本当にあなたが死んだとしたらね、というブラックジョークの上でのこ

とだ。これは姫自身の気持として、宮が会いに来ないからと言って、その薄情な気持ちを恨むことはない、と言っているにしても同じこと、というより、より強烈な嫌味だ。それに、ブラックジョークとはいうものの、姫は是を軽口で言っているのではなく、今から無沙汰をする言い訳やら小賢しい愚痴を言っている宮に、そんなことを言うのなら、本当に死んで見せなさいよ、そしたら文句は言わないから、と本気で詰め寄っているのだろう。その純真さは、遊び人の匂宮に通じるはずも無さそうだが。

とあるを(と姫の返歌があるのを)、「*変はらむをば恨めしう思ふべかりけり(私の心変わりを恨めしく思っているらしい)」と見たまふにも(と宮はその純真な本気に気付かず、遊び女郎の戯れ歌のように思いなさって)、いと*らうたし(とても満足です)。 *「変はらむをば恨めしう思ふべかりけり」は、姫の言う「命のみ定めなき世と思はましかば」を世慣れた女の冗句で<死ぬよりまだから>と言ったものと宮が誤解したことを示している。姫の歌をそう取れば、「心をば嘆かざらまし」は<稀なお越しでもお見限りで無ければ嬉しいわ>と聞こえる。この姫を相手にそんな誤解は有り得ないような気もするが、本文にこう書いてある以上、読者は了承せざるを得ない。 *「らうたし」は<可愛い。劳しい。>という語用もあるが、評価として<上出来だ。上首尾だ。>という言い方でもあって、此处ではそういう宮の気分を言っている、かと思う。

「いかなる人の心変はりを見ならひて(誰の心変わりに懲りて、そんな歌詠みをなさるのか)」

など、ほほ笑みて(などと微笑んで)、大将のここに渡し初めたまひけむほどを(大将が姫をこの山荘に連れ込みなされた経緯を)、返す返すゆかしがりたまひて(何度も知りたがりなさって)、問ひたまふを(宮がお尋ねになるのを)、苦しがりて(姫は困って)、

「え言はぬことを(答えられないことを)、かうのたまふこそ(何度もお聞きになって)」

と、うち怨じたるさまも(と拗ねて見せる様も)、若びたり(初々しい)。おのづからそれは聞き出でてむ(その内にそれは女房などから聞き出せるだろう)、と思すものから(と宮はお思いになりながらも)、言はせまほしきぞ*わりなきや(姫自身に言わせようとするのは、遊び気分の困った意地悪です)。 *「わりなし」は<無理だ。難儀だ。困る。>で、此处でも<困りものです>で良さそう。ところで、注には<『休聞抄』は「双」と指摘。『集成』は「本人の口から言わせたいとは、困ったものです。匂宮の蕩児ぶりをからかい気味に言う草子地」。『完訳』は「語り手の評言。無理強いをする匂宮の好色ぶりを強調」と注す。>とある。で、改めて思うに、私が、特に姫の返歌をだが、それを含めてこの段の話を読み違えていなければ、問題は宮の遊び認識と姫の本気認識との行き違いが不穏なほど深刻なことにありそう。とすると、なるほどこの「わりなし」は<匂宮の蕩児ぶりをからかい気味に言う草子地>のようだし<無理強いをする匂宮の好色ぶりを強調>しているようだが、その宮の認識が姫とはだいぶ違う事も示して置くべきような気がして来る。で、宮の<遊び気分の意地悪>と明示補語する。

[第九段 翌朝、匂宮、京へ帰る]

夜さり、京へ遣はしつる*大夫参りて、右近に会ひたり(夜になって京へ遣わされていた五位蔵人の時方が山荘に戻って来て右近に面会しました)。 *「大夫」は「たいふ」と読みがある。「たいふ」は<五位の者の通称。>と古語辞典にある。注には<大夫時方。前に「(六位)蔵人よりかうぶり得たる」と五位になった大内記時方である。>とある。確かに、二段に従者の一人が「さては御乳母子の蔵人よりかうぶり得たる若き人」と紹介されていた。つまり、匂宮の乳母子=五位蔵人で、京へ遣はしつる大夫=時方だから、乳母子=時方となる

ようだ。しかし、時方=大内記とは、二段での考察や六段の語りからも考え難く、「五位になった大内記時方である」という注釈は意味不明だ。

「後の宮よりも御使参りて(六条院では、中宮様からの御使者も宮様を訪ねて来ていて)、右の大殿もむつかりきこえさせたまひて(御不在を右大臣も批判申しなさって)、『人に知られさせたまはぬ御ありきは(お忍びでの御外出は)、いと軽々しく(まことに軽々しく)、なめげなることもあるを(秩序を乱すことも出てくるので)、すべて(大目付として)、内裏などに聞こし召さむことも(其等の不始末を帝が御耳にされることがあっては)、身のためなむいとからき(立場上困る)』といみじく申させたまひけり(と厳しく申されていました)。東山に聖御覧じにとなむ(宮様は東山に高僧と会いにお出掛けですと)、人にはものしはべりつる(言い訳して来ました)」

など語りて(と次第を話して)、

「女こそ罪深うおはするものはあれ(女というものは罪深くいらっしゃる)。*すずろなる眷属の人をさへ惑はしたまひて(無関係の従順な従者に過ぎない私まで奔走させなさって)、虚言をさへせさせたまふよ(嘘まで吐かせなさるのだから)」 *「すずろ」は<漫然としている>ということらしく、「すずろなる」で<無関係の>という言い方になるようだ。「眷属(けんぞく)」は本来は<親族。身内。>のことらしいが、それに準ずるほど親しい<腹心の従者>も示すようで、それを自称するのは自負ではなく自慢であり、まして「眷属の人」と客体視した言い方は、あなたなら良く事情が分かるように、という含みを持たせた馴れ馴れしい軽口だ。この人は右近にいやに馴れ馴れしい。で、「すずろなる眷属の人」は<無関係の従順な私>くらいの言い方になりそうだ。ところで、「無関係」とは<偶々其処に居る>という物性認識を言っているのだろうが、それはまた、そう見える視点に立っている、ということでもある。その<偶々其処に居る>本人は、その人なりの事情があつて<其処に居る>のであつて、それが<偶々>に見えるのは、他者が他意を持ってその人を利用したいと意図したからだ。つまり、その本人にしてみれば、本来の目的とは別の目的に動員される、という事態を示す。此処では、乳母子時方は勾宮の道中護衛を本来の任務としていて、宮が女遊びで京を不在することの取り繕いに奔走することなどは、全くの追加任務であつて、迷惑この上ない、という言い方をしている、ということになる。が、この宮の外出は本来の目的が女遊びなのであつて、その腹心の従者の主たる任務は<取り繕い>そのものだ。この時方の言い方は、自分を客体視して<宮に振り回されている>と愚痴っている形だが、話の内実はそれほどの宮との近しさの自慢でもあり、姫事の核心に関わっている自負であり、異様な事態を面白く楽しんでいる姿でもある。事態を深刻に受け止めている右近との温度差は相当にありそうだ。

と言へば(と時方が言うと)、

「聖の名をさへつけきこえさせたまひてければ(姫を聖と名付けて下さったのは)、いとよし(大変結構です)。*私の罪も(あなたが嘘を吐いた個人的な罪も)、それにて滅ぼしたまふらむ(聖人の功德で消えなさるでしょう)。まことに(本当に)、いとあやしき御心の(とても突飛な宮様の御考えは)、*げに(こうしてあなたが奔走するほどまでに)、いかでならはせたまひけむ(どうして身に付けなされたのでしょうか)。かねてかうおはしますべしと承らましにも(前以て御来訪を承っておりますら)、いとかたじけなければ(とても恐れ多い方ですので)、たばかりきこえさせてましものを(上手く取り計らい申しましたものを)。奥なき御ありきにこそは(突然の御来訪でしたからねえ)」 *「わたくし」は<私人としてのあなた=あなた御自身>という言い方らしい。話者自身のことは

<我が>とかくこの>とか言うのだろう。また、「つみ」は時方の<嘘を吐いた罪>らしい。注には此処の文意を<『完訳』は「時方が嘘をついた罪障も、浮舟を聖扱いたした功德で消えよう」と注す。>としてある。*「げに」は普通は<仰せの通り>と相手の発言に同意を示す語用だが、時方は<女の所為>という言い方をされていて、その言い方には右近は絶対に同調できない。だから、この右近の「げに」は<実際に奔走した時方の徒労>に対して労いを示すと同時に、この事態自体は<「御心の」=兵部卿が原因>という筋での認識に時方の同意を求める話運びにすりかえる語用、でもあるのだろう。

と、*扱ひきこゆ(と右近は応じ申します)。*「あつかふ」は<応接する。応対する。>で、確かに右近は時方の事情説明に対応して、またその軽口口調にも同調して、相手の機嫌に気を遣ってはいるが、決して浮かれ気分を共有したりせず、まして軽口内容には一切同意せず、ほとんど子供の遣いを労うようなアシラヒに見える。

参りて(右近は寢室の宮の御前に参上して)、「さなむ(時方殿の報告はこのようでした)」とまねびきこゆれば(とお伝え申すと)、「げに(六条院がそういう騒ぎでは)、いかならむ(放って置けない)」と、思しやるに(とお考えになって)、

「所狭き身こそわびしけれ(親王などという窮屈な身が辛い)。軽らかなるほどの殿上人などにて(身軽な殿上役人くらいに)、しばしあらばや(暫く成っていたいものだ)。いかがすべき(どうしたものか)。かうつつむべき人目も(このように避けるべき人目も)、え*憚りあふまじくなむ(いつまでも抑え切れず、いつか事は露見する)。*「はばかる」は<遠慮される。気が引ける。>でもあるが、本来は<蔓延る→邪魔立てする→止める、防ぐ、抑える>で、むしろ転じて<自重する>という語用になるようだ。「憚りあふ」は<止めるに足る→抑え切る>。

大将もいかに思はむとすらむ(そうなる、大将は如何思うだろうか)。*さるべきほどとは言ひながら(親しい叔父甥の仲とは言え)、あやしきまで(それにしても不思議なほど)、昔より睦まじき仲に(昔から仲良くして来たのに)、かかる心の隔ての知られたらむ時(こういう裏切りを知られたら)、恥づかしう(恥づかしい)。*「さるべきほど」は注に<『集成』は「親しいのは当然の叔父甥の間柄とはいえ」と注す。>とある。

またいかにぞや(また、どうだろう)。世のたとひに言ふこともあれば(世の習いと人が言うように)、待ち遠なるわがおこたりをも知らず(大将があなたを待ち遠く思わせる自分の無沙汰を顧みず)、怨みられたまはむをさへなむ思ふ(あなたが不貞をなじられ為さるのではないかと案じられます)。夢にも人に知られたまふまじきさまにて(大将がこのことを夢にも気付きなさらぬ内に)、ここならぬ所に率て離れたてまつらむ(あなたを他の所に連れ出し申そう)。

とぞのたまふ(と兵部卿は仰います)。*今日さへかくて籠もりゐたまふべきならねば(兵部卿は今日でさえ、この宇治山荘に籠もって居られない立場なので)、出でたまひなむとするにも(夜明け前にお帰りになるろうとするにも)、*袖の中にぞ留めたまひつらむ*かし(古今集の歌のように、魂を涙の袖に留めなさって悲しみと果敢無さに暮れていらっしゃるのでしょうか)。*「けふさへ」は注に<『完訳』は「今日で三日目になる」と注す。>とある。分かり難い注だ。段頭に「夜さり」とあって、今はまだ二日目の夜だ。その二日目ですえ兵部卿は宇治に留まれる身ではない。尤も、そも宇治に外出できる身でもないが、それが夜明けとなれば<三日目になってしまう>ので、今直ぐ「(夜明け前に)出でたまひなむとする」とい

う文意に取るのが、此処の文の普通の素直な読み方かと思う。*「袖の中にぞ留む」は注に<『源氏釈』は「あかざりし袖の中にや入りにけむ我が魂のなき心地する」(古今集雑下、九九二、陸奥)を指摘。明融臨模本も付箋で同歌を指摘。三光院「草子地に推してかけり」と指摘。>とある。「あかざりし」は<飽き足りない、物足りない、心残りだ、名残惜しい>。分かり難いのは「袖」で、別れる時に言う「袖」は<涙を拭う悲しい思い>だろうか。その「袖の中」に「入りにけむ我が魂」とは<悲しみに浸る>だろうか。「たましひのなきこち」は<虚無感>。ざっと、惜別の悲しみと虚しさの歌らしい。*「かし」は<念押し終助詞>と古語辞典にあるが、基本的には半疑問や不確かさの認識の基づいて、同意や確認を求める語用かと思う。で、この「かし」だが、此処で宮の気持を推量するのは姫しか居ないだろうから、是は姫の目線で期待を込めて宮を見つめるさまを示す言い方なのだろう。

明け果てぬ前にと(夜が明け切らない前にと)、人びとしはぶき驚かしきこゆ(供人たちは咳払いして出発を促し申します)。妻戸にもろともに率ておはして(宮は妻戸に姫と一緒に連れていらっしゃって)、え出でやりたまはず(外に出ていらっしゃいません)。

「世に知らず惑ふべきかな、先に立つ涙も道をかきくらしつつ」(和歌 51-04)

「かつて無いほど迷いそう、涙で道も見えなくて」(意識 51-04)

*注に<匂宮から浮舟への贈歌。「世」「夜」の懸詞。「夜」「惑ふ」「立つ」「道」は縁語。>とある。と言われても、私には別に気の利いた言い回しにも見えない。何と言うか、遊び相手に別れの決まり文句を言っただけ、みたいに聞こえるが、どうなんだろう。

女も(姫も女心に)、限りなくあはれと思ひけり(限りなく悲しく思いました)。「をんなも」の「も」は、宮の歌への共感というよりは、姫が宮の姿に本心の惜別の情を期待して、それが真ならと仮定した言い方かと思う。確かに、宮に惜別の情はありそうだが、それは大将が可愛がっている女が、実際に抱いてみても素直で可愛く、名残惜しいが、自分の立場ではそう容易には此処へは通えない、という困難さを悔しがっているのであり、大将がこの姫を可愛がる真意やら、正味の所、宮自身が何処までこの姫に本気なのかは、あまり突き詰めて考えていないように、私には思えてならない。

「涙をもほどなき袖にせきかねて、いかに別れをとどむべき身ぞ」(和歌 51-05)

「せきかねて 涙あふれる 別れ袖」(意識 51-05)

*「涙をもほどなき袖にせきかねて」は、「袖の中にぞ留めたまひつらむかし」という地文に呼応した詠み方だろうが、宮の歌には左様な語用や詠み方は示されていない。だから、別れの「涙」を表題にして姫はしっかり返歌しているが、その詠み筋が古今集に習った工夫だと宮に通じたのかは不明だ。尤も、古今集は当時の文化人の基礎教養だったようだから、宮は自分がそれを踏んでいなくても、姫の返歌がそれを踏んでいることは判ったかも知れない。ただ、当歌はそれ自体で自立した歌筋を持つので、特に古歌に習っているとは気付かない可能性はある。何より、宮自身が真に「袖の中にぞ留めたまひつらむ」ほどの心境でなかったら、この姫の返歌に特に感じ入ることはないだろう。また、「せきかねていかにとどむべき」という素直な論理は姫の律儀さを示していそうで、一生懸命工夫した健気さも作者は込めているのかも知れない。ただ、歌の出来栄に然程の情趣は私は感じないが。

風の音もいと荒ましく(風の音もとても荒々しく)、霜深き暁に(霜が多く降りた早朝に)、*おのが衣々も冷やかになりたる心地して(それぞれの衣服が冷えた寂しさの中で別れの身支度が整って)、御馬に乗りたまふほど(宮は御馬にお乗りになる時に)、引き返すやうにあさましけれど(何度も振り向いて未練がましいが)、御供の人びと、「いと*戯れにくし」と思ひて(御供の人々が「これ以上遅れては洒落にならない」と思って)、ただ急がしに急がし出づれば(とにかく下男たちを急がせて出発させたので)、我にもあらで出でたまひぬ(宮も慌ててお帰りになりました)。
*「おのがきぬぎぬ」は注に<『源氏積』は「しののめのほがらほがらと明けゆけばおのが衣ぎぬなるぞ悲しき」(古今集恋三、六三七、読人しらず)を指摘。>とある。「きぬぎぬなる」は<衣擦れの音が鳴る>のかと思ったら、全く違って、「きぬぎぬ」は「後朝」と表記される語と同じで大辞泉に<衣を重ねて掛けて共寝をした男女が、翌朝別れるときそれぞれ身につける、その衣。>とあり、また<男女が共寝をして過ごした翌朝。また、その朝の別れ。>のことであり、更に<男女、夫婦の離別。>のことでもあるようで、つまり「衣々なる」は<別れの身支度が出来た>という言い方らしい。此処ではそれを踏まえての洒落語用のようだ。 *「たはぶれにくし」は今の<冗談じゃない。洒落にならない。ふざけるな。いいかげんにしろ。>と同じ慣用句らしい。注には<『評釈』は「ありぬやと心見がてらあひ見ねばたはぶれにくきまでぞ恋しき」(古今集俳諧、一〇二五、読人しらず)を指摘。>とある。この歌は以前にも何度か引かれていて、作者のお気に入りなのかもしれない。が改めて見てみると、「たはぶれにくきまでぞこひしき」が如何にも不器用そうなおどけた語感に見えて、だから戯れ歌なのだろうと簡単に納得していたような気がするが、それなら「たはぶれにくし」の語調自体に妙な生真面目さがあるのかと言えば、「たはぶれにくし」自体は<許容限度を超えている>という認識で、軽い語用も重い語用も成立するし、現に多様に多用されている。また、「ありぬ」の「ぬ」は確定意の強調語用で、「ありぬや」は<成立するに違いないだろう＝先ず大丈夫だろう>という言い方。だから理屈としては、「こひ」という<他者を求める自発主観欲求>に一定の客観容量を想定して、実在りもしない規格に「ありぬ(合致する)」とか「たはぶれにくし(合致しない)」とかいう考え方自体の無意味さが馬鹿げているのであって、そういうものの言い方をする設定が可笑しい、ということのようだ。だから、むしろ「ありぬやと」からして、およそ情趣の無い言い方で惚けているが、結句の「恋しき」で見事にオチが着いたという言い回しの妙、こそがこの歌の楽しさなのだろう。そして、実はこの手の怠慢思考は現に良く有るから呆れる。

*この五位二人なむ(この京を往復した時方ともう一人の五位大夫の二人が)、御馬の口にはさぶらひける(宮の御馬の口取りを勤めます)。さかしき山越え出でてぞ(険しい山道を抜け出てから)、おのおの馬には乗る(各自も馬に乘ります)。みぎはの氷を踏みならず馬の足音さへ(水際の氷を踏み鳴らず馬の足音さえ)、心細くもの悲し(宇治との別れを告げるようで心細く悲しく響きます)。昔もこの道にのみこそは(兵部卿は昔もこの宇治路だけは)、かかる山踏みはしたまひしかば(このように山越えをなさったことがあるので)、「あやしかりける里の契りかな(妙に宇治に縁があるものだ)」と思す(とお思いになります)。 *「このごゐふたり」は注に<大内記と時方。>とある。が、この「この」の近称の対象となるべき直前の話題提供が何も無い。是が脱稿でないとしたら、作者は一時的に失語症に陥り、誰も其を指摘しなかったことになる。有り得ない。だから注記の<大内記と時方。>の根拠は有り得ない。仮に、この「この五位二人なむ」の語調を二段の「御供に、昔もかしこの案内知れりし者、二、三人、この内記、さては御乳母子の蔵人よりかうぶり得たる若き人、睦ましき限りを選びたまひて、大将、今日明日よにおはせじなど、内記によく案内聞きたまひて、出で立ちたまふにつけても、いにしへを思し出づ」に続くものと、無理やり他の記事に目を瞑って読んだとしても、「五位」と見做し得るのは<御乳母子>の一人だけだ。しかし、その読み方では<御乳母子=時方>さえ成立していない。で、御乳母子が時方だと知るべく此処まで本文を読み進んで来れば、この「この」に該当する話題提供は無いのだから、その時方でさえ此処の「この五位二人」の内の一人と特定出

来る根拠は無い。それでも、此処の不明点を以て中断しても居られないので、強引に話を続けるために「この五位二人」の内の一人は<時方>と見做して読み進む。が、官位相当表を見ると大内記は正六位上とあり、もう一人を大内記とするには抵抗が強い。是は難文の類ではなく不可解文で、実に困った記事だ。